表記形式と普遍性[0)]

―― 「文字圏の文明史」から見た現代日本 ――

鹿　島　英　一

1．はじめに
2．古今東西の諸例
　2．1　古代メソポタミア（楔形文字圏）
　2．2　古代エジプト文化圏
　2．3　東地中海周辺
　2．4　フェニキア系諸文字の地域
　2．5　ギリシャ文字文化圏
　2．6　アラム文字文化圏
　2．7　アラビア文字文化圏
　2．8　インド文字文化圏
　2．9　東アジア文字圏
　2.10　その他の文字
3．世界帝国と公用文字
4．結

1．はじめに

「日本語の漢字は（文字としては）おかしい（＝strange)」とか「日本語の表記法は奇妙だ（＝abnormal)」という話を耳にしたことがある。主に、非漢字圏の人からである。だが、自分が長い間慣れ親しんだものについて、そう言われることは気持ちのいいものではない。自分が事実上それしか知らなければ不安になるし、批判者が日本語の読み書きに堪能でなければ強い反発を覚え、時には自らの学習能力の無さを誤魔化す単なる照れ隠しかとさえ思う。だが、これは別に日本語の表記法についてだけ言えることではなく、馴れ親しんだ技術や習慣への愛着が持つ無批判的な標準化の危険性の一例に過ぎないという気がする。筆者は仕事柄時折、外国人学習者の批判に対して

殆ど同じ論法で反撃を試みるが、彼らの投げるブーメラン自体の優秀性のためであろう、大抵は気分悪そうにして話題を替えるからである。

勿論、原因の細部は人によって異なるし、具体的な論点や指摘する現象も必ずしも同じでないが、要は「発音が（文字中に）明記されていない上に、読みが沢山ある。」ことや「漢字、ひらがな、カタカナという3種類の文字を混用する。」ことが原因らしい。ただ、（表面上は）それは往々にして、英語や他の西欧語との（暗黙の）対照しか念頭に無いような発言の形を採るが、実際には半ば意識的に目を背けている自らに最も馴染みのある初等教育などでの教育言語や同じ文字文化圏に属す近隣地域の諸言語の表記法や文字体系が背景にある場合が少なくないように思われる。

筆者は以前から、世界各地の文字をほぼ同じ基準の下に纏めて取り扱うことも肝要だと考えていた[1)]。要するに、「必ずしも視点の同じでない、分野別の詳細な記述の寄せ集め」ではない「文字圏の文明史」を、一個人が書こうとすることで初めて見えてくるものに期待していた。それを実行してみたのが本稿である。尚、[　] 内は特に明記の無い限り、文字（字形）とする。

2．古今東西の諸例

2.1 古代メソポタミア（楔形文字圏）

シュメール・アッカド文明圏という言葉に象徴される様に、シュメール語と表裏一体の関係で生まれたとされる絵的文字は、紀元前三千年期の後半には楔の形をした有向直線の組合せの形となってほぼ固定し、アッカド帝国の勢力拡張などにともなってティグリスとユーフラテスの中・下流域の沼沢地から西北方のアナトリアの高地の様な粘土板の材料の豊富でない土地や東方のエラムの様な固有の文字を持つ所にまでも広がっていった。表記された言語も多彩で、字形も時と所によって異なるが、後代に主流が本来の中心地に近いバビロニア系の書体と上流域のアッシリア系の書体に分れた点を除けば、割に統一が取れているとも言える。この地域の後代の主流となったアッカド語などのセム系の諸言語は、シュメール語と言語構造が違うために、一つのシュメール語の文字が音標音節文字としても表意文字（多音節読み）としても使われた。つまりは、限定符と呼ばれる数十字の一群を除けば、音・訓両読併用の万葉仮名式漢字による日本文と基本的には同じというわけである。無論、音節文字も表意文字も読みは基本的に複数である。

他に、外見の類似したものに、古代ペルシャ文字とウガリット文字と呼ばれる2文字がある。アッシリアの文字が使用頻度の高い文字だけで数百あるのに対し、前者は語間境界符号や王名・神名の表意文字を入れても50字に満たず、後者は音標文字ばかりで皆で30字ほどである。その上、両者とも字形の構成法や子音が単音を表すことなど、本来の楔形文字とは相当に異なる。その内、曾て楔形文字が隆盛を極めた地域の世界帝国であるハカーマニシュ（アカイメネース）朝の、アラム語文と並ぶ公用文の古代ペルシャ文字は、[𐎠][2]という基本の5方向は守っていたし、機能も（時には単独の子音を表すとは言え）基本的には、現代ヒンディー文の語末の字と似た程度には音節的であった。

これに対し、地域の西端の地中海岸のラース・シャムラで、曾ての王宮跡から初めて出土したウガリット文字はハード面でのメソポタミア要素とソフト面での非メソポタミア要素を併せ持った折衷様式であると言える。即ち、粘土板に今日の我々とほぼ同じようにして持ったペンで楔形の窪みをつけ、太陽光で乾かして完成するのだが、[A] の様な左右対称と見做せる字形を30%も持つこと[3]や文字の機能がその並びを含めてアリフ・ベト（アルファベット）の系統であるといった特徴を持つのである。

ところで、この両者は我々の現実感覚として、どのぐらい違うのであろうか。平仮名とカタカナの程度なのか、仮名とローマ字程度なのか。そこで、我々に身近な東アジアの文字に沿えば、凡そ次のように要約される。即ち、本来の楔形文字を漢字に対応させた場合、古代ペルシャ文字は女真文字に、ウガリット文字は日本の平仮名にほぼ当たる。

というのも、女真文字の漢字に対する字形上の近さは相当なものと見えるのに対し、平仮名の場合はその結果における字形の遠さに加えて、並びを含む文字の機能はシッダマートリカー（悉曇）文字か何かの北インド系の文字の系統にあると見られるからである。無論、いわゆる楔の形にほぼ近い古代ペルシャの書体が文明発祥の地に近いバビロニア系の晩期の書体に連なっているという事情もこの観点を支持する。ただ、通常、アルファベットは単音文字だと言われており、この点が気になる。だが、ウガリット文字の様に、セム語を表記する限りは、子音文字と見るか後続する母音を含めた音節文字と見るかは単なる立場の違いに過ぎないため、ここでは素通りすることができる。

2.2 古代エジプト文化圏

ナイル河の下流域約1000 km 程、最後の瀑布（cataract）が終わった辺りである。地形、気候、史的経緯から上エジプトと下エジプトに分かれるが、下エジプトを主産地とするパピルスからはその繊維を用いてパピルス紙をつくり、上エジプトでは石を、特に最後の瀑布直下にあるアスワン付近では、碑文用の良質の花崗岩を多量に産出した。これは「中王国」や「新王国」[4]の時代の都テーベのすぐ近くである。

大型の石の碑文には絵柄のはっきりしたヒエログリフ（聖刻文字）書体が用いられ、逆の個人用文書にはパピルス紙に筆記体にあたる絵柄の少し崩れたヒエラティック（神官文字）書体が用いられた。文学などは、量が多く、石に刻むのは無理なので、パピルスの巻紙と先を潰した葦のペンで書くのに適した特別な字体が後から発達普及したのであろう。新王国時代も終わり、ギリシャ人がアレキサンドリア・コプトスから命令を発する頃には、ヒエログリフの原形を留めない抽象的な符号に変わったデモーティックという書体（民衆書体）が広く用いられるようになっていた。やはりそれも、パピルスの茎を削いだものを、ナイルの毎年の氾濫時に川の水が含む膠のような物質で、張合わせて造った紙状の特産品かつ戦略物質に主に書かれたが、（旧来の神官書体が忘却の淵に近づいていたためか）有名な「ロゼッタ石」[5]の様に時には石碑にも使われた。

また、インクには粉絵具か、煤か良質の木炭の粉に水と膠を混ぜてつくったインクを用い、インク壺に入れておき、硯かパレットに移してから使い、アラバスター（雪花石膏）、木材、象牙、スレートなどでできた硯の類いの用具などもあったと言う。紙とパピルス（紙）という書写材料の類似性から、東アジアの我々には納得しやすい。しかも、自分で墨をすらずに墨汁のままで買ってきて使う現行の主流方式に近い。無論、書記はその筆や硯や墨汁を使ってパピルス紙にヒエラティックかデモーティック書体で書いたのであろう。

ここで、紙とパピルス紙との類似を軸に、更に東アジアとの類推を押し進めると用途を含めて聖刻文字と対応するのは甲骨文字や金石文の字体であろう。すると、神官の常用字体には紙の普及に伴って漢代以降に広まっていった隷書が、また非神官層にも使用者を獲得した後代の走行体風の民衆書体には（楷書・行書・草書の中の）行書か草書が対応しよう。その際、エジプト

では聖刻文字と神官文字の使用時期にかなり重なりがあるようで、その点は東アジアと必ずしも同じでない。ただ、それはともかく、エジプトでは楷書に当たるものが成立しなかったためであろう、結局この地の文字はエジプト起源の字形を幾らか加えただけのギリシャ文字とも言える折衷様式のコプト文字に取って替わられてしまった。無論、その善し悪しを論ずることはそう簡単ではない。だが、漢字の字形や用法の複雑さに加えて、旧仮名遣い文と口語との大きな解離を放置しておいたために、第二次大戦後に日本語もローマ字との間で似た経験をしかかったことは記憶に新しい。

ところで、これと似た文字は古代エジプト世界からナイル河に沿って瀑布を幾つか遡った地域にもあった。古代ヌビア文字、メロエ（クシュ）文字などがそれである。ただ、大半が表意（表語）文字の上、膨大な字数を数えるヒエログリフと違い、これらは基本的に表音文字だけからなるコプト文字式である。その内、字形はヌビアの文字がコプト風だが、メロエ文字はヒエログリフの単子音文字風であり[6]、ギリシャ文字の原理とエジプト固有の字形の折衷様式という意味で先に見たウガリット文字を思わせる。

2.3 東地中海周辺

この地域には粘土板文書の形体が広く普及し、（宝）石などの印章[7]と並んで主流をなす。また、一部地域は地理的に楔形文字圏と重なっているが、これは東端部に当たるカッパドキア（アナトリア東部）に新古の両ハッティ帝国の中心部があったためである。また、域内のあちこちに散在する文字は互いに何となく似ている。つまり、外観からは絵文字と線文字に大別でき、日本の仮名の様な開音節＜（子音＋）母音＞文字が基本である点が共通している。だが、大抵は素性もはっきりせず、名称も出土地名などを冠した暫定形式である。当然、未解読な部分が少なくないため詳細は未だはっきりしていない。

この内、代表的なのは線文字Ａ、線文字Ｂ[8]、絵文字Ａ、絵文字Ｂの四種のクレタ＝ミュケーナイ文字で、粘土板文書の様式はメソポタミアのものと幾らか違う。一方、キプロス文字は字形がクレタ＝ミュケーナイの線文字とかなり似ていて、中心をなすギリシャ語方言のものは解読されている[9]。解読字・未解読字ともに碑文に使われ、解読の方は硬貨にも使われている点で小アジア、アナトリアのものと類似する。キプロス島には、他に解読・未解

読の両者の共通の祖先の可能性のある別の文字も発見されている。文字数などの面も含めて両者は日本の仮名によく似た原理であるため、その文は英語やマレー語などの語彙を漢字表記[10]した漢語・華語文の様相を呈していて、後代の我々には元の音が復元しにくい。

次に、キプロス島から東南寄りに海を渡ると、古代都市グブラ（ギリシャ語名：ビブロス[11]に着くが、そこには青銅板と石柱に記されたグブラ文字がある。一応、音節文字らしいが、母音音価がはっきりせず、確かなことは不明であるという。そこから、北東方面に向かった北シリアや南アナトリアには、ハッティ新帝国崩壊後の紀元前一千年期の初期までハッティ人[12]が使っていた絵文字（別名：アナトリア聖刻文字）がある。主に石の碑文や印章に刻まれたこの文字は、基本的には楔形文字ハッティ語文と併用されたようだが[13]、使用が長期間かつ広範囲にわたったのはこの文字の方である。尚、この文字では音節文字は極く一部に過ぎないようで、（音節文字の原理が日本の仮名風開音節である点を除けば）ちょうどエジプトのヒエログリフの様相を呈している。

2.4 フェニキア系諸文字の地域

アルファベット[14]と通称される、古代セム人が使ったこの有名な文字の成立は、明らかに周囲の先進文化圏の影響を受けているにも拘らず、必ずしも明らかでない[15]。尤も、インドのブラーフミー系音節文字の様に、程度の違いこそあれ、少なくない文字が厳密に言えばそうである。故地から移動してシリアに位置を占めた西セム人の内、アラム人は主に隊商を組んで陸路で、カナーン人の一派であるフェニキア人は天然の良港を拠点にして、それぞれアジア、アフリカ、ヨーロッパに跨がる商人として活躍した。彼らはエジプトやメソポタミアの諸帝国の文字を利用することもあったが、目的が実用つまり効率ということであったので複雑さを回避する文字の普及に貢献した。また、それは結果として、後のハカーマニシュ帝国におけるアラム文字の、またアレクサンドロス以後の世界におけるギリシャ文字の隆盛を招来した。ただ、実際にはアラム文字とギリシャ文字の進んだ方向はほぼ逆であった。即ち、アラム文字がイラン系を始めとする非セム系諸言語に仲間を取り替えながら（時には字形も変えて）東へ向かったのに対し、ギリシャ文字はほぼ同じ過程を経つつアラビア文字に追われて結局は西に向かった[16]。そして、

それは二千年余り後の20世紀になって、地球を一周した後、東アジアで再び衝突を開始した。即ち、広義のアラム系文字の内、蒙古文字は外モンゴルでギリシャ系のキリール文字によって一旦は廃字にされたし、満州文字はギリシャ系に属すラテン文字によって国家もろとも廃品にされた。だが、この両系の文字は漢字を潰すことはできず、結局のところ、フェニキア系の文字は世界制覇に失敗した[17]。

話を戻そう。さて、母音価を表記しないため、一種の音節文字とも言えるこの種の単子音文字は、文字数20余のフェニキア文字、パレスティナ文字、アラム文字などの北西セム文字と、文字数30ほどの南アラビア[18]の碑文文字に大別されるが、いずれも紀元前一千年期以降に盛えた。無論、ハッティの絵文字とも時代的に重なっており、実際に現在の東南トルコからはフェニキア文字とハッティ絵文字の対訳形式文付きの像も出ている。

ところで、この種の文字の盛衰にはいろんなことが関係している。その内の一つはキリスト教及び同種の宗教の伝播が諸文字の広汎な普及の加速装置の役割を果たしたことである。例えば、ヘブライ文字はユダヤ教諸文書に、またシリア文字は対応するキリスト教文書によって主に広がっていったし、ゾロアスター教聖典や北東アフリカのキリスト教はパフラビー（中世ペルシャ語）文字やギリシャ系文字で文字化された。もしここにアラビア文字も含めれば、そのコーランとの関係から、それは一層明らかである[19]。

二つ目は、この地域では母音の表記の必要性の比較的低いセム系の言語が支配的であったことである。従って、セム語との関係が切れた場合に、いろんな事態が発生したのは当然であった。例えば、ギリシャ文字に変わる過程では独立の母音文字が出現したし、元来がフェニキア文字の走行体とも言えるアラム文字はイラン系言語の表記用になって時代が下るに従い、一層判読が困難になり、本来の用途に適さなくなっていった。尤も、セム系語の聖典でも時代が下るのに伴って、母音符号を考案する必要に迫られたから、或る程度は割引して観る必要はあろう。

ところで、フェニキア文字の一部はエジプト産のパピルス紙、羊・小牛の皮紙にインク（液体）で記録するのに適した流線型風の字体をしているが、同時にそれはこの種の書写材料が以前より大量に出回り始めたことも意味している。事実その後のオリエント世界の主流になった。実際、ペルセポリスを陥落させたアレクサンドロス軍は宮殿の文書庫から粘土板文書と並んで多

量の皮紙文書を発見しているが、それは紙製の本と共に半導体や磁性体などで作った記憶素子に書き込まれた本が先進国の国立中央図書館に詰まっている現在と似た状況を思わせる。ついでに言えば、当時小アジアのイオニアでも、パピルス紙を含めて、書写材料のことを鞣した「皮」と総称していたと言う。ちょうど我々が「紙でないもの」を、パピルス紙、羊皮紙と呼び、東アジア出身の「紙」に破れて遥か久しい地域の人々が愛着を以て依然として「パピルス」（英語：paper，ドイツ語：papier，など）と呼び続けている態度に似ている。

そして、この観点は更に、ヘブライ文字やギリシャ文字が直線を組み合わせた角張った字体をその後も保ったのは、逆に言えばパピルス紙などが入手しにくい辺境で主に使われたためということを示唆する。ただ、ギリシャ文字はパピルス紙や皮紙に適したオリエントのアラム文字の世界を後に受け継いだわけだから、その時には既にギリシャ文字での古典が確立していたという事情もあったのであろう。尚、ギリシャ文字とアラム文字はギリシャ語やアラム語と解離して独立の文字圏の親字になった後半生をもつから、本稿ではアラビア文字と並ぶ独立の項目を立てた。

2.5 ギリシャ文字文化圏

ヘブライ式の文字名称を持ち、フェニキアの形をした碑文用のこの文字が借用であることをギリシャ人は意識していたと言う。日本人による漢字ほどではないが、彼らもまた用法を少し変えた。要は、セム語でも実際上用いていた半母音（［Ｉ］と［Υ］）と喉音（［Ａ］）用の字を母音字に転用する便法に、喉音文字を二つ（［Ｅ］と［Ｏ］）加えて、正式に踏み切ったのである。漢字の元来の音と朝鮮、日本、越南の音の差異に当たる現象が［Ｚ］［Ξ］などに関してあった。

そして、この文字は、19世紀から20世紀にかけてラテン文字が世界に広がった様に、紀元前一千年期前期の短時にエーゲ海周辺に広がった。それは、結果として、リュキアやリューディアなどの非ギリシャ語地域の小アジア型と東西のギリシャ型の三つに分かれて落ち着いた。その内、西ギリシャ型は小アジア起源説のあるエトルリア人の文字を媒介にして、後にイタリア半島の諸民族の間に広がった。無論、ローマの文字もその一つで、現代世界の主流の文字である。また、アレクサンドロス後のオリエント（ヘレニズム）世

界に共通語であるギリシャ語（コイネー）を運んだ標準形文字は、文化優位を誇った東イオニアの東部型の文字であった。無論、他の二種類のギリシャ文字を駆逐していったはずである。だが、実際には駆逐されていなかった。というのは、数百年後に建国された地中海の海洋世界帝国、ローマの首都の街角の言葉は西部型に連なるローマ字で書かれていたからである。

では、東型はどうなったのか。勿論、暫らくはどうなったわけでもなかった。だが、ビザンツ帝国に取って替わったオスマン帝国が崩壊した後は、そのあまり重要でない破片を集めて造った小国（現在のギリシャ）しかこの文字を使う国がなくなってしまって、今では昔の面影は全くない。いくらフェニキア文字を受け継ぎ、ラテン文字とキリール文字を大勢力として後代に残した功績は大きいと言っても淋しいことは否めない。余談だが、現在は隆盛を誇る英語と英文もいずれはこうなるのであろう。

ところで、ラテン文字の媒介となったエトルリア文字などはどうなったのだろうか。少なくとも、ローマ帝国の西半分の滅亡までは保存されていたという。原因は割に単純で、ヨーロッパの中世の写字生は（稀に模写するギリシャ字写本を除けば）原則としてラテン語以外のものを無視したからである。これは、要するに自分の属する社会や文明圏の教養（先祖の遺産）とは関係がないと観る、ある種の知的無関心から出ている。それは、基本的には、現代のアラブ・エジプト人がコプト文字やヒエログリフの印された古い神殿に接する時の態度と同じであり、イスラエル人が古いヘブライ語の諸文書や（余所者の筆者には時にそう見えるが）廃墟に対する振舞いとは明らかに異質のものである。ただ、これには、ビザンツ帝国の（中世）ギリシャ語やグプタ朝のサンスクリットに見られた、比較的積極的な別の要素も指摘できる。つまり、実用になり得る幾つかの候補の中からどれかを選ぼうとすれば、残りは徹底的ないし意図的に排斥せざるを得ないのである。無論、例は他にもある。政治面でマウリア朝マガダ国を再興した感のあるグプタ朝は、仏教の開祖となったブッダの頃（七百年以上前）には既にプラークリット諸語に主導権が移っていたという現実を重視しないで、帝国の公用語に兆しの見えるサンスクリットを復活させる決心をし、その「人工言語」の使用を推進したし、東アジア大陸でも「文言」[20]は長期に亙って持ち堪えた。

次に、この文字のエジプト方面への進出を見よう。東地中海の制海権は、「海の民」とエジプトで呼ばれ、同時に東地中海沿岸やハッティ帝国にも襲

いかかった海賊達によって握られた一時期を挟んで、クレタ人からフェニキア人に移った。彼らは、地中海のライバル、ギリシャ人と同じく統一国家は造らず、やがてアッシリア帝国、続いてメディア・ペルシャ帝国の支配下に入った後も、その帝国海軍として後発のギリシャ人と争っていた。顕著な例はペルシャ＝ギリシャ戦争である。ギリシャ人はフェニキア人から受け継いだ文字を商業等の実用だけでなく、文学や哲学の表記に転用し、それを伴ってサイス朝時代からヘレネース（ギリシャ人）の祖界地の様相を呈していたアレキサンドリアを足掛かりにしてエジプトに乗り込んでいった。だが、広範囲に広がったのは主としてキリスト教文書の表記に使われたからである。一方、フェニキア人の大商人達の文字は、結局はギリシャ文字に取って替わられた。「廂を貸して、母屋を取られた。」のには、都市国家内で特権階級を構成して秘密主義の寡頭政治をしていたために、その行政や商業の文書量の外、その利用者自体もあまり多くなかったことも関係がある。

少し具体的に見てみよう。オリエント世界からアラム文字と楔形文字を駆逐したギリシャ文字は、エジプトでは先祖に当るかもしれないヒエログリフから一部を取って加えて変身し、コプト（エジプト）文字という名で、既に古語の表記を専らとしていたヒエログリフ系の民衆書体に止めを刺した。キリスト教をオシリス崇拝と重ねて理解する農民には、民衆書体で表記された古語など理解できず、話言葉に文字を与える必要があったのである。それはちょうど、旧仮名遣いの漢字仮名混淆文の世界であった日本に、ローマ字書きの口語文が強い位置を占めたような状況に当たろう。ただ、第二次大戦後の日本では仮名遣いの改革を実施して対抗した上、ローマ字日本文は心の空白を埋めるものを必ずしも持ち込まなかった点が異なる。その後、この文字の前線は南に向かって拡大した。既に見た様に、ヌビアやメロエの方まで影響が及んだが、更に南のアビシニアまでは届かなかったようである。というのも、単性論のキリスト教は南進を続けたにも拘らず、その地の諸文字はインド大陸を思わせる音節文字しか知られていないからである。

ところで、20世紀末の現代世界の主流であるラテン系文字は西ギリシャ型文字の系列に連なっていた。では、ギリシャ系の文字には他にどんなものがあるのだろうか。ビザンツからロシアを経由してユーラシアを横断し、ラテン文字にあまり見劣りしない数の言語の表記に使われ始めたキリール文字が先ず思い浮かぶ。また、コンスタンチノープルからさほど遠くない所では、

山岳地帯にはカフカス・アルバニア文字を含むアルメニア文字やグルジア文字が、またハンガリアにはギリシャ文字やグラゴール文字の一部の字形を借りた文字がある。この外、ヨーロッパ北部のルーネ文字、古いアイルランド語の文字、結局はキリール系文字に取って替わられたグラゴール文字などもある。

2.6 アラム文字文化圏

ギリシャ人がペルシャ帝国と争ったように、アラム人はアッシリア帝国と争い、その盛衰に深く関わった。彼らもまた都市国家を成して同族相食み、統一帝国は造らなかった。些か、現在までのヨーロッパ（西欧キリスト教世界）を連想させる趣きである。また、紀元前8世紀末にアッシリアに最後の独立を奪われて以来の強制移住政策も、結果的にはアラム語とアラム文字の勢力拡大を助長する効果を生むことになったためもあって、アッシリア語（アッカド語）と並ぶ帝国の公用語、外交語、商用語として、次第にメソポタミア一帯の文明の正統な継承者の地位を得ていった[21]。また、ハカーマニシュ帝国時代には、首都を含む東方辺境部は古代ペルシャ語と新形式の楔形文字に任せて、アラム語は西方の旧来の文化的な中心地の実際上の公用語の地位を保った。それはちょうどギリシャ語コイネーが帝国の首都のある辺境部はラテン語に任せて、旧来の文化の中心地の公用語となったのに対応している。程度の差を除けば、類例はモンゴル帝国の近代ペルシャ語と蒙古語、清朝の漢語と満州語などの様に、身近な所にもある。

ところで、この二重公用文字制度に移行した背景だが、多分それは海上で力を持つに至ったフェニキア人との緩衝勢力として、また帝国の地理的拡大に伴って増加したと思われる煩瑣な楔形文字に好意的でない勢力の台頭に対応するものとしてのアラム文字の持つ潜在的な能力のせいではなかろうか。この観点は、アラム文字の実態がフェニキア文字の走行体（草書体）に過ぎない程度のものであることとよく符合する。

さて、この様な事情で、アラム文字は親に当るフェニキア文字を実用から追い出した後、結局は自身もギリシャ文字に追われる羽目に陥った。だが、元来の基盤が比較的脆弱だった帝国東部では、却って長持ちするところとなり、中世のパルティア語、ペルシャ語（パフラビー）、ソグド語等のイラン語にアラム文字をしっかり渡すまでは公用語の位置を保った。だが、イラン

諸語とのカップリングにおいて母音を表記するシステムの確立に失敗したために、結局この地では文字として成功しなかった。また、帝国はインダス河流域にも進出していたから、その方面にも痕跡を残した。即ち、北インドのカロシュティー文字の母胎となり、皮肉にもヘレニズムの進行する北インドとイラン諸族の地である中央アジアで長く使用された。一方、アラム文字自体もアショーカ王碑文などでアラム語やアールヤ諸語の表記に使われたが、アラム＝ブラーフミー折衷方式のカロシュティー文字と共に、インド大陸の言語をうまく表す競争において、結局はブラーフミー系文字に破れた。ここの言語も北方は母音の重要な印欧語だったのである。

これに対し、帝国東部に基盤を持った古代ペルシャ語文の方はどうなったのだろうか。実はこの文字も単音文字化はかなり進んでいたが、歴史の浅さに加え、誤読しやすい文字体系を持っていたためか[22]、結局生き残れなかった。だが、何れにしろ、この時点でアラム文字はアラム語と運命をほぼ分かった。その後の状況は、例えて言えば、漢字が漢族の言語を離れて、日本や朝鮮やベトナムを始めとする周辺地域の言語とだけ運命を伴にするような、我々にはなかなか実感を以て理解し難いものである。だが、とにかくアラム文字は形を変えつつ生き延びたのである。

アラム文字の後期の拠点となったイラン諸語との関係をもう少し見よう。イラン諸語の北方諸族中の東方のマッサゲタイ（ギリシャの呼称）の後裔の一つがソグド人で、植民都市を各地に持つ商人として活躍していたために、7～8世紀頃にはソグド語は中央アジアの国際語の地位に登っていた。

では、南方系はどうだろうか。地域も年代も雑多な集成のアヴェスター聖典の言語、アルシャック朝（安息）の中世パルティア語、サーサーン朝の中世ペルシャ語など、アラム文字で書かれたものは皆この中に入るから文字を含む文明の担い手としてはこちらの方が中心である[23]。この内、量的に最も比重がかかっているのは中世ペルシャ語であろう。というのも、それはアルシャック朝の遺産を継承しているからである。サーサーン朝初期の諸王の碑文などは両言語併記のものが多いと言う。尚、中世パルティア語の文書には東トルキスタンのトルファンから出たマニ教文献が少なくないらしいが、そこにはパルサワ（現ホラサーン）という王朝の故地の地理的影響を見ることができるかもしれない。

さて、インドのヴェーダ聖典は周知の様に、ブラーフミー系文字で文字化

されているが、この文字とゾロアスター教のアヴェスター聖典の関係もほぼ同じであり、そのためにこの文字はマニ教やマズダグ教等のペルシャ語文書に必須の地位を得た。だが、同時にそれに伴って生れる外部からのお節介に煩わされるのは嫌ったようである。例えば、教祖マーニーの始めた外来要素との折衷式の宗教は、広報活動の面でも世界宗教になる要件を備えていて、話言葉を文字化したり、その伝達手段である文字の改革に熱心であったが、マニ教のイラン文化圏からの撤退に伴って、その寿命を終えた。要するに、母胎のゾロアスター教文書を抱えるパフラビー側は、欠陥を直して生き延びることではなく、アラビア文字による自然死の宣告までの短い期間の快適な生活を選んだのである。

ところで、ハカーマニシュ朝の下の標準アラム文字の書体が分裂したのはセレウコス朝の崩壊後のことで、その中にはアルシャック・パフラビー書体（通称：パルティア文字）から8世紀頃にマニ教の布教活動に関連して派生したらしい、中央アジアのオルホン河やイェニセイ河の周辺に散在する突厥（古代トルコ）文字もある。ウィグル人がソグド文字でなくこの文字を受け継ぐ可能性も考え得る状況だったと言う。尚、ネストリウス派とヤコブ派という宗派（キリスト教）で書体の分かれたシリア文字もこの文化圏に属す。

［ソグド系の諸文字］

現在、トルキスタン（トルコ人の地）と称される草原及び砂漠とオアシス都市からなる中央アジアの曾ての主役はイラン諸族であり、紀元一千年期末には主導権は既にソグド人の手にあった。ソグド語の文字は仏教、マニ教、景教（ネストリウス派キリスト教）などの宗教文献が多く、それもあってかこの走行体風の字形には地域に依ると思われる変種も多い。従って、なかなか厄介な代物であるが、もしこの文字をアラム系文字と見れば[24]、ここからウィグル文字、モンゴル帝国と清朝の正文である蒙古文字と満州文字、及びその変種であるトド文字、錫伯（シボ）文字などの、一連の縦書きの文字が順次誕生した外、突厥文字とも関係があって、アラム文字文化圏内の一大勢力に当たる[25]。そこで、本節内に小項を立てて扱うことにした。

さて、9世紀の半ば頃から西遷したウィグル人が突厥文字に替えて使い始めた文字は、ソグド文字のマニ教文献の書体に繋がっているらしい。だが、彼らは途中でこれを90°回転させて、左から右への縦書きに変えた。漢文と

の併書の必要性から既にその種の使い方をしていた突厥文字の影響かもしれない。周知の様に、このウィグル人の文字は（モンゴル帝国と満州帝国の文字として）後に世界的な一大勢力となったわけだが、それにはこの書写方向の変更が幸いしたようである。似た例は紀元前二千年期の前半以前のメソポタミアでも起こっている。この場合は、右から左への縦書きから左から右への横書きに90°回転した後で絵文字が楔形に変わり、結果としてその後の大発展に繋がった。

ウイグル文字も始めは、異なる母音や（日本の初期の仮名に似て）清音と濁音の区別もできないなど、突厥文字に比べても技術的にはあまりいいものではなかったが、後には弁別点を使って字数を増やし改良した。ところで、その文字が蒙古帝国の公用文字となった経過には紆余曲折があった。即ち、初期はウィグル人がこの帝国の書記をしており、ちょうどキリスト教の宣教師達が馴染んだ方式のラテン文字で戦国時代前後の日本語を書いたように、ウィグル文字で蒙古語を書いていた。だが、急に巨大となった帝国は13世紀後半には、蒙古語に合わせた修正を施したサキヤ文字に切り替え、その後継者で同じチベット人の僧パクパは字形までもチベット文字のものを創った。だが、チベット文典の翻訳は普及せず、結局は100年ほどで廃止され、再び（改良された）サキヤ文字に戻った。それが所謂、蒙古文字である。なお、17世紀にチベット仏典の正確な翻訳を目指してオイラット方言用に登場したトド文字はその改良版であり、清朝時代はオイラット専用の公文書に使われたが、今では中国の新疆省と青海省および旧ソ連領とアメリカのモンゴル諸族の間に散在するだけである。

ところで、蒙古文字はその後も幾度か改正された。だが、ソグド文字以来の欠点を一部に残したままであったため、20世紀になってその点をキリール文字に突かれた格好のハルハ方言は、一時は蒙古高原（外蒙古）から永久追放されたかと見えるほどの仕打ちを受けた。ソ連邦崩壊後の最近になって、中国領に避難していたこの文字を再び蒙古全域に広げる試みが始まったが、この文字の習得が国家の成員の義務に指定されても実際にその任に耐え得るには、民族的かつ情緒的情熱を補う何らかの技術面での梃子入れが欠かせないように見える。キリール文字やラテン文字に加えて、隣接地域（中国）の漢文までが横書きであれば、尚更である。

尚、初期の満州文字は蒙古文字を流用した無点圏文字であったが、やがて

日本の仮名の「゜」や「゛」に似た役割の点や圏などを加えて改良し有点圏文字とした。また、中国の新彊省に現在も残る錫伯文字はそれを幾らか改正したものである。

2.7 アラビア文字文化圏

一時期広大な地域に広がったアラビア文字使用地域も、フレンギー（西欧人）の言うところの大航海時代を経て、ラテン系文字に逆転された。20世紀の初頭まで「イスラム圏」とほぼ同義であったアラビア文字圏は、トルコ、旧ソ連領、インドネシア、マレーシア、東アフリカなどでラテン系文字とキリール文字に勢力を次々と奪われた上、中国でもラテン系文字に破れかけ、一時はアラブ人とペルシャ文化圏の地域文字に転落する瀬戸際まで行った。その後は、勝者側の諸配慮やＯＡＰＥＣの金融力の外、近年のイスラム復興運動もあって、勢力の退潮に歯止めがかかった状況にあるが、アラム系文字と同様、非セム語の表記に根本的な問題を抱えているので、少なくとも何か技術的な解決策を講じない限り、先細りの危険性に依然として曝されていると言える[26]。

ところで、この文字の由来ははっきりしないと言う。勿論、西アラム語の一つで、ヨルダン南部のペトラ（岩山）の遺跡を都としたナバテア王国の言語の表記に使われた文字と関係があるのは確かである。だが、住民もアラブ人だったらしいこの都市が陥落した紀元前１世紀末と、アラビア文字の成立した年代との間には三百年から五百年の空白がある上、地理的分布においても両者にはずれ[27]があって、アラビア文字はその完成後にローマのリーメス（帝国境界線）に沿ってペトラに来たらしいのである[28]。

さて、ナバテア文字は他のフェニキア系の文字より未成熟だったようで、母音どころか、子音の一部も区別できなかった。日本の仮名も濁点の無い頃は［た］と［だ］の区別もできなかったからそう特別でもないが、母音の区別もダメでは問題は小さくない。そこで、ネストリウス派のキリスト教文書（シリア文字）で確立された弁別点などの技術を、モーゼ五書の校訂（ヘブライ語）を通して、初期のクーファ体のコーランに導入した[29]。

今度は書体の話に移る。周知の様に、イスラム圏では絵画禁止の原則のためか、古来装飾字体が多く、漢字圏の「書道」に似たものも含めて文字芸術が盛んであった上、都市・地域毎にも特徴があった[30]。アッバース朝崩壊前

の最盛期には、書体も20余を数えたと言うが、現在も続く、クーファ、ナスク（書写用）、スルス（装飾用）、ライハーン（装飾用）、リカーア（筆記体）の古典的五大書体は、漢字の楷書、行書、草書などに相当するように見える。これに対し、アッバース朝崩壊後はイスラム世界が政治的に複数の小中心地に分かれ、書体もこれに追随した感があるが、結局のところアラビア文化圏とペルシャ・トルコ文化圏に二分された感がある。即ち、アラビア語圏ではクーファ体とナスク体が引き続いて栄えたが、イランではパフラビー文字の影響もあってかペルシャ式書体が次々と生まれ、15世紀には書道も確立したし、オスマン帝国でも基本的にはナスタアリーク体を使い、16～17世紀には書道家も輩出したのである。この外、東方のウルドゥー語では後期のペルシャ書体であるナスタアリーク体を使ったが、イランとの中間のパシュトゥー語やアフガンの言語やシンディ語はナスク体を用いている。尤も、イラン周辺でのこの状況の大変化にはイスラム圏における紙の普及との時期的な一致やモンゴル人の侵入に相前後して起こった近東でのイスラム教への大量改宗なども関係していよう。

次に、イフリキーヤ（北アフリカ）とアンダルースの様子を見てみよう。マグレブ（西方）では、チェニジア、アルジェリア、モロッコを通ってサハラ（砂漠）を渡ったハウサ語圏（ナイジェリア北部）へと字体が順次変化してゆく。だが、現在「マグレブ書体」の名でこの地域を代表するのはフェズ書体の後裔である。この文字は書体面では曾て東方（イスラム圏の中心部）に栄えたクーファ体に近いが、基本字母順の後半が他の地域と異なり独自性を示していて、別の文字体系へ移行する一歩手前の状態と認識できる[31]。尤も、元来がベルベル語地域であるから理解できる話である。余談ながら、南北朝鮮の辞書におけるハングル字母順序の小さな違いも長引けば両文化の乖離を示すパラメータとなるかもしれない。次に、この地イフリキーヤからジブラルタルに渡たるとアンダルースに入る。アンダルース書体はマグレブ書体より更に丸味を帯びるが基本的にはクーファ書体の系統のままである。後にはマグレブにも進出した。

残るは旧ソ連邦・中国内のトルコ系住民などや東アフリカ、インドネシア及びマレーシア付近のイスラム教徒地域である。というのも、アラビア文字はイスラム教と表裏一体の関係で広がったからである。中国では、人民共和国成立後の一時的な混乱期を体験した後、今はウィグル文やカザフ文などで

用いられていているが、(手元の書籍は) ナスク体である。また、人口の多い回族は独自の言語が無く、漢字 (漢語) を使用している[32]。旧ソ連邦内のアラビア文字の運命は歴史の流れに翻弄されてきた。例えば、アゼルバイジャン語では12世紀のイスラム化以来1930前後まで一貫してアラビア文字が使用されていたが、ロシア革命後のスターリン体制の国際情勢認識を敏感かつ率直に反映した結果、ラテン文字からキリール文字へという急激な変遷の憂き目に会った。ソ連邦崩壊後の1990年代には、アラビア系文字への回帰が試みられているようで、まだ揺れはおさまっていない。無論、他のトルコ系の言語やカフカスの言語もほぼ似た過程を辿った。

また、スワヒリ語や半島マレー語がリングァフランカ (国際語) であった東アフリカやインドネシア・マレーシア地域も状況はほぼ大同小異である。即ち、スワヒリ語は曾てはアラビア文字だったが、20世紀になってラテン文字に切り替わったし、マラッカ王国の繁栄の後塵を拝して広まってジャワでも半島部でも通じたアラビア文字のマレー文、ジャーウィ (Jawi) は今ではラテン文字で書かれる上、多言語の新生国家インドネシアの国語という姉妹版まで生み出した。だが、同時に最近のイスラム回帰風潮に見られる如く、この地域におけるアラビア文字の将来の最終的様相は未だ明らかでない[33]。それはマダカスカル島の言語やイスラム・フィリピン、スールー諸島のモロ語の様な例がこの地域に残っていることからも分かる。

ところで、アラビア文字にも現在のラテン文字の様な世界文字であった時代が勿論あって、その痕跡が残っている。例えば、イベリア半島のレコンキスタ (失地回復) 後もアラブ人に同化したキリスト教徒は当時の古ロマンス語をアラビア文字で書いていたし、オスマン帝国統治下の地域からはスラブ (セルボ・クロアチア) 語をアラビア文字で書いた文献もあるようだ。共に母音用記号付きである。この外、アラビア文字で訳された聖書が50言語近くある見本帖もあるようで、ヘブライ文字の場合に比べて圧倒的に多い。

2.8 インド文字文化圏

アラム文字のインド進出後の初期に、主に北方の中央アジア方面で比較的短期間使われたカロシュティー文字を除けば、ブラーフミー系の文字がこの地を代表する。アラム文字とそれに近いカロシュティー文字のインド進出を阻んだこの文字の出所は定かではない。共に音節文字だが、[か] と [き]

で字形の異なる日本の仮名やキプロス文字などと違い、母音用符号を用いて［k+i］や［k+u］の様に二つの字形で表す方式で、エチオピアの文字や（幾分違うが）朝鮮半島のハングルの範疇に属すと見れば解り易い。

ところで、（フェニキア系の）子音文字だった南アラビア語の碑文文字がアビシニアの音節文字に変わったのは、紅海をイェーメン側から渡って暫く経ってからのことらしく、エチオピア側の最古の碑文には母音表記がないと言う。インドの場合にも幾分似たことが言える。即ち、（現象面での結果だけを繋げば）アラム文字のインド進出とブラーフミー系の音節文字成立の間にはカロシュティー文字が介在しており、その原理にはインドの影響が見られるのである。これは、要するにカロシュティー文字がブラーフミー文字の原理とアラム文字の字形の折衷物である可能性の示唆であり、その場合にはメロエのエチオピア帝国のクシュ文字、北シリアのウガリット文字などと同じ範疇に属すことになる。ただ、それに際しては書写方向のことが幾分気になる。ブラーフミー文字が左から右へ書くのに対し、カロシュティー文字は（アラム文字と同様）右から左へ書くからである。しかし、フェニキアの文字がギリシャ文字に変わる際も、左から右への方式が定着する以前に牛耕式と通称される両方向の併用方式を暫らく使用していたことがあったが、例えばそれを想起すれば問題は無かろう[34]。

さて、カロシュティー文字は、ハカーマニシュ朝のダーレヨーシュ一世のインド侵入後のまだアラム文字の勢力が東進している時期に、母音を明記するアラム文字の化身・改良型として登場した。だが、インド文化が北インドから中央アジアに進出してくるのに伴い、原理のほぼ同じブラーフミー文字に5世紀以降交替されてしまった。ところで、この両者は時代的にもあまり隔たっていず、共にアショーカ碑文にも記されているため、何かグラゴール文字とキリール文字の関係を想起させるところがある。尤も、勝ち残った方のブラーフミー文字も起源ははっきりしないため、字数が近く、同じ書写方向で、似た構造の音節文字を基本とする古代ペルシャ文字の影響も否定できないらしい[35]。

次は、ブラーフミー系文字の史的展開と書体の変遷について述べる。先ずは地理的な記述からである。この文化圏は時代と共にその地理的領域を拡大縮小したが、概ね北は「インド人殺し」（ヒンズー・クッシュ）の山々からカラコルムの山並みを経て、万年雪を戴くヒマラヤ山脈を結ぶ線、南は海の

向こうのスリ・ランカ島までのほぼ全域を含む。勿論、ここ一千年足らずの間は、アラビア文字圏に浸食されて劣勢気味だが、現時点ではまだミャンマーからインドシナ半島の大部分を保持しており[36]、重心を東に移しながらも、結果としてその分を埋め合わせた格好になっている。(以下ではこの地域をインドと略称。)

この地域の世界帝国であるマウルヤ朝マガタの分裂後、シュンガ朝が都を東部に遷して中心部を受け継いだ。だが、碑文の字は重子音などを除けば、前の時期と同一書体である。インド特有の母音配列には既になっているが、[ṛ, ṝ, ḷ, ḹ] 音の文字はまだないようだ。西部インドでは、クシャーナ朝後期になると碑文の言語はそれまでのプラークリットに替わって次第にサンスクリットが復活してきたが、書体の方は幾分か丸くなる程度に止まった。そして、サンスクリット復活の流れは古代バラモン文化優先の政策を採る世界帝国のグプタ朝によって強められ、同時に全土にわたる文字の統一ももたらされた。東アジアの唐も政治的には漢を復活し同じ様な位置を占めるが、言語の面ではそれほど復古主義的ではなかった。

その後、紀元6世紀にグプタ朝が崩壊するとこの王朝期の統一書体を親字とし、以後の政治地図の色分けを反映して、北インド、西インド、デカン、南インドと四分されて地理的、言語的文化圏毎に変化して今日に至った。それはちょうどアラビア文字圏でのアッバース朝の崩壊後の過程にほぼ匹敵するが、この地域では字体の分化が比較的大きいこともあってか、文字体系の呼び名まで変わる[37]のが常である。従って、本節が些か長くなるのは止むを得ない。では、順に見てゆこう。

北インド、即ちガンジス・ヤムナ河の全流域周辺には、グプタ朝期を代表する北方系書体のグプタ文字とさして変わらないシッダマートリカー文字が10世紀頃まで普及していた。日本で五十音図の成立に関係した「悉曇文字」のことである。この文字の東部型はベンガル文字へ繋がり、西部型はカシュミールで普及したシャーラダ国の文字[38]である。この時期のカシュミールは概ね純インド様式文化の一大拠点と化し、東アジアの南宋期の江南地方の様相を呈していた。そんなカシュミールで、シャーラダの文字はシッダマートリカー文字とある時期重なりながら13世紀ころまでインド西部一帯に広く普及していたらしい。タッカリーはその走行体である。無論、北インドには他にも文字はいろいろあったが、重要なのはスィンディー語やラヘンダー語

の表記に使われたランダー文字である。というのは、13世紀以降のアラビア文字の大洪水によってカシミール、スィンド、パンジャブの諸文字が流され尽くす中、主要3変種の一つがシーク教聖典のお陰もあって、今日も東パンジャブを中心に生き延びているからである。ただし、名称もグルムキー文字と変わり、形もシャーラダ書体との折衷式（のランダー文字）である。

一方、東部型の子孫であるベンガル文字は9世紀頃から碑文などに徐々に表れ始め、12世紀以後になって独自の字形となった。この文字が仏教文化圏であるガンジス河中下流に普及していったのは、グプタ朝の崩壊後に12世紀まで続いたパーラ王朝のお陰であった。今では、ベンガル語の他、アッサム語[39]などのチベット・ビルマ系の言語にも使うし、バラモン用と書記階級用の2書体を持つオリヤー文字もこれから派生したと言う。出所のはっきりしないナーガリー文字よりは正統派に属する文字だが、勢力的に遅れをとっていることは否めない。

西インドでは、8世紀にラージャスタンなどにナーガリー文字が発生し、次第に北インドにも広がって、10世紀以降はシッダマートリカー文字と交替していった。北部でのシャーラダ書体の文字の浸透と時を同じくしたわけである。また、それは中央アジアでのアラビア文字によるグプタ文字の追い落としともほぼ期を一にしている。さて、名称の起源の不明なこのナーガリー文字は11世紀以後になると今度は、北インドではガズニー朝のイスラム支配者たち、南インドではラーシュトラクター朝のヒンズー支配者たちによって東部と北部の一部を除くインド全域に普及されていった。要するに、歴史的結果として、この文字はアラビア文字のインドへの大洪水を塞き止める役割を担いながら、ほぼ全インド的な規模でグプタ文字を受け継いだのである。そう見れば、その機能がその後一千年間近く続いたとしても不思議はない。実際、シャーラダ文字でも書かれたサンスクリット文献は、当時との書体差が大きくないナーガリー文字で多量に書かれたために、現在でも容易に近づけるのである。

今度は南インドとデカンの話に移る。南方インド固有の文字は、より北側のカンナラ・テルグ文字と南側のパッラヴァ・グランタ文字の二つがある。北のカルナータカ、マハーラシュトラ、アーンドラの（デカン）地域では、碑文に独自の文字が表れ、8世紀にはカンナラ文字となり、やがてテルグ文字にもなった。後者は13世紀には書体が少し変わったのでアーンドラ文字と

も言うらしい。何れにしても、11世紀後のナーガリー文字の南進によって、南方系のブラーフミー系文字は全てを併せてもその領域は狭い。

一方、最南部（南インド）ではグプタ朝の都マガダから遠かったせいで、早くから独自の文字がパッラヴァ朝の碑文に表れ、7世紀にはタミール・ナドゥにおいてサンスクリット文献（グランタ）の文字となった。このパッラヴァ系の文字は、その後の東南アジアでおいてカンナラ文字より広汎に広がった。また、この地ではバラモン教とジャイナ教による文字が分化したが、先のオリヤー文字やカルナータカのトゥル文字と並ぶものである。次に、現行のタミール文字やマラヤーラム文字はどの系統に属すのだろうか。実は、グランタ文字と南方ブラーフミー文字の一種[40]の子孫だと言う。

ところで、ヨーロッパのラテン系文字にも、ドイツ書体（ドイツ文字）やイタリア書体（イタリック体）などがあって、曾ては地域的独自性を主張していたようだが、活字体、筆記体、装飾用等の目的別の書体を別にすれば、現在は概ね統一されていると見てよい。だが、インドではグジャラーティー文字はナーガリー文字からその字形が直ぐ類推できる程度の違いしか無いにも拘らず、ナーガリー文字に取って替わられる兆しは殆ど無い[41]。端的に言えば、それはそうなって久しいという歴史的事情による。ムガール帝国、イギリス・インド帝国、インド連邦と、政治的には近年のＥＣ（ヨローッパ共同体）やＥＵ（ヨーロッパ連合）にその萌芽を見る西欧連邦構想の先を行っているにも拘らずである。そこで、ナーガリー文字とラテン文字の対比を中心に据えて、この地域の特徴を簡単に見ることにする。

さて、デーバ・ナーガリー[42]にアラビア文字のインドへの大洪水を塞き止める役割が期待されている節があることは既に見た。それは、北部や西部の対イスラム前線寄りにこの文字の分布が偏っていること、グプタ文字との関係を含めて出所が不明瞭であるなどといった諸特徴を持つ[43]。ヒンディー語などはウルドゥー文字を借用しないで、何故わざわざこの文字を使うのかと思うほどである。母音表記の便利さと天秤に掛けても技術的な理由は決して自明ではない。一方、曾て、特にローマ帝国の西半分の崩壊後のギリシャ文字文化圏の主流はギリシャ文字であってラテン文字ではなかった。だが、ビザンツ帝国の消滅とイベリア半島でのレコンキスタがなった15世紀以後はこの文字圏の主導権はラテン文字に移ったため、ナーガリー文字とラテン文字はその置かれた状況が似ることとなった。無論、主たる侵入外来者がアラ

ビア文字であることも同じである。

ところで、ナーガリー系文字は現在、マラーティー語やサンスクリット文献にも使う所謂ナーガリー文字、ビハーリー文字などの東部型、グジャラーティー文字などの西部型の3系統に分かれているが、こうなったのは14世紀が境だと言う。もしそうだとすれば、10世紀以降に汎インド的となったこの文字は、殆ど時を経ずして分裂を始めたことになるが、同時にこの辺りに、独立指向の強いこの文字文化圏の特徴が見てとれる。尚、インドでは階層による使用文字（言語）の分化に関する記述や言及によく遇う。例えば、東部型に属すマイティリー文字やグジャラート商人だけが速記用に使う西部型のマハージャニー文字がそうである。多分、それらは所謂カースト制度（小communitiesへの細分化現象）と関係があるのだが、正直言ってこのことに関する筆者の理解の水準は、あまり長くないインド滞在経験しかないためであろう、古今東西の文字をほぼ同一の基準で纏めて取り扱うという本稿の目的遂行に耐え得るほどの水準に達していないので、時に応じて書き出すのに止めた。

ここで、ギリシャ文字文化圏でのキリール文字の相当物を探してみよう。キリール文字は一千年ほど前に比較的明瞭な過程を経て生み落とされた[44]。勿論、それらを拾ってここまで見事に育て上げた最大の功労者は、ロシアの諸帝国と正教キリスト教会である。すると、伝統的な文化遺産の保存を担うギリシャ文字との関係が比較的濃いという意味ではベンガル文字が適当である。だが、故地を大きく踏みだして世界文字への道を開いたという意味では南方系ブラーフミー文字の方がふさわしい。しかも、（南方系文字に2系統があったように）失敗したグラゴール文字も入れればギリシャ文字系の派生字も複数あったわけだから、順当なところであろう。

そこで、最後に亜大陸とスリ・ランカから外へ出ていった文字の話をしよう。一方は東南アジア方面へ、もう一つはチベット高原方面へ向かった。

［東南アジアの諸文字］

南方系のブラーフミー文字の一部はインド洋を渡って東方に向かったが、その競争において南インドの文字（パッラヴァ系）はデカンの文字（カンナラ・テルグ）より優位に立った。何れの場合もヒンズーや仏教の文化を携えてのことである。さて、その先発隊は既に紀元4、5世紀には上陸を終えて

いたようで、結局のところ今日の東南アジア地域は次の様にほぼ3分される状態に落ち着いた。即ち、(古いジャワに代表される) (1)島嶼・半島部、北方の (2)大陸東部 と (3)大陸西部 である。その内、(1)と(2)は南インドとの、また(3)はデカンとの繋がりが強いようである。サンスクリットやパーリー語(プラークリット)でない[45]、落ち着き先の人々の口語で書かれた重要な碑文を、言語面から見れば、島嶼・半島部はマレイ系であり、北方の大陸部はタイ系が主要勢力である。そして、それは主に半島からのシュリー・ヴィジャヤ王国の拡大の結果であり、またモンゴル人の雲南方面からの侵入に端を発したタイ諸族の大移動によって生じた、ビルマの崩壊を始めとする政治地図の変化の結果である。その際、東南アジア大陸部の中央を南下してきたタイ諸族は東部型と西部型の字形とに分かれて今日に至っていてるが、これは中央アジアから南下してきた古代のアールヤ人が東側のブラーフミー系文字と西側の古代ペルシャ文字に分かれたのに似ている。

古代ジャワ文字やスマトラ北中部のバタック文字などの(1)は、現在もそのヒンズー教徒の末裔がベトナムのカムラン湾近くに残る古チャム文字を何らかの意味で介したらしい。無論、ジャワ系文字を中心にして、一部は今もこの島嶼部に残っており、一時はフィリピンの島々にもタガログ文字やビサヤ文字などとして上陸した。だが、フィリピンの文字は充分に根を張る前に、後から来たアラビア文字に取って替わられた。

(2)の主流は古クメール文字で、古チャム文字に遅れて7世紀頃表れた[46]。さて、スコータイ王朝の国字は古クメール文字から派生したが、声調符号が加えて改造してある。現在のタイ王国の文字[47]は、正書法上の改革が施してあることを除けば、これとは書体が幾分違う程度の違いしかない。ラオスの文字も同様である。また、曾てのチェンマイの八百王国の文字や文字原理の同じベトナムの山岳部の白タイ、黒タイの文字もこの系統である。尚、ベトナムの山岳部にはタイ文字を縦書きするプータイ文字もあると言う。

(3)にはピュー文字や古モン文字がある。後者はカンナラ・テルグ系文字であり、ビルマ文字もこの派生である。ピュー文字は縦長、初期のビルマ文字を含めて古モン文字は角型で、現行のビルマ文字とは外観を異にする。一部だが、ビルマ文字もモン文字にない声調符号を採用している。また、ビルマ文字からはカレン文字が派生したが、3種類の内の古い方のスゴ・カレンとポー・カレンは基本原理が同じである。尚、パオ・カレンは字形・原理共に

ビルマ文字に近い。この外、ミャンマーや中国の国境周辺のタイ諸族の文字は基本的には西部型で、西からカームティー文字（インド・アッサム州）、シャン文字（ミャンマー・シャン州）、ルー文字とクーン文字（シャン州からタイ領内）、チェンマイ・ラオ語のユアン文字（タイ北部）、中国雲南省のタイ・ロ、金平タイ及びタイ・ナ、タイ・ホンの2系列4種の文字がそうである。ただ、中国領内では人民共和国成立後は国家の方針で統一タイ文字を作って、共有する努力がなされている。

［チベット文字圏］

字形がグプタ文字に近いブラーフミー系のこの文字は、「ラマ教」の経典に依って、その亜文化圏を形成している[48]。それは、ヒマラヤ連山の西端付近で境を接するアラビア文字圏がコーランに依っているのに似ているが、パクパ文字やレプチャ文字といった官製の派生文字が殆ど成功しなかったために、白亜のラマ廟に象徴される寺院都市に保存伝承される密教的色彩の濃い北伝仏教の経典に、ほぼ全面的に依っている。

チベット文字の起源は流布している伝承[49]ほどはっきりしてはいないが、曾てヒマラヤ周辺で世界文字として使われたことはほぼ確かである。例えば（残存する文献の大半に当る古典チベット語以外に）曾てはナム語、ジャンジュン語、ギャロン語、（ロロ語系）トス語などの広汎な言語の表記、西夏文字の注音、漢語の表記などに使われた。また、現代ではチベット語の諸方言の外に、ネパール、ブータン、シッキムなどにも分布しているが、綴字法もブータンに見られる様に古典チベット語と必ずしも同じではない。

ところで、先に述べた両種の派生文字はチベット文字がヒマラヤを登って暫らく経った後のものである。その内、重要なのは蒙古帝国（元朝）の公用文字であったパクパ文字であろう。帝国支配者の言語（モンゴル語）を表記するために、チベット文字の方形字を縦書きにして並べた観のこの文字は、古代ペルシャ楔形文字を思わせる折衷方式であり、使用を奨励した帝国の崩壊とほぼその運命を伴にして、短い寿命を終えた。多分、原理は13世紀当時の中央アジアの普及していたソグド系ウィグル文字である。やや穿った見方をすれば、（侵入してきたギリシャ勢力に対するイラン人の怨念が残っているソグド文字の化身である）ウィグル文字自身は、母音調和などのある母音の重要なトルコ諸語やモンゴル諸語を充分に表せないため、字形だけをチベッ

ト文字から流用して当座を凌いだとも、ウィグル文字にその座を奪われた突厥文字がチベット人、パクパの手を借りて中央アジアの主役の地位を獲得したとも言える。

一方、18世紀初頭のチベット時代にシッキム王によって造られたという伝承のあるレプチャ文字は、無頭字書体[50]のチベット文字を90°回転した外観をしている点を除けば、漢字の草書体から派生した平仮名のようである[51]。

2.9 東アジア文字圏

中国南部の山岳地帯に比較的古くから分布展開してきた文字群を除けば、契丹、女真、西夏、ハングル、字喃、日本の仮名などを含めた広い意味での漢字がこの地を代表することは特に論を待たない。

さて、亀甲獣骨や銅器に刻まれた初期の文字が漢字に繋がることはほぼ確かであり、共に少なくとも紀元前二千年期の半ば近くまでは遡れると言う。両者の字形の差もそんなに大きくなく、殷時代に甲骨文から金文へ連続的に変化したらしい。その結果、西周時代には金文が主流となり、銘文も長く、字形も整ってきた。西周末に、中原地方（黄河中下流）からの文化の拡散と政治地図の南方への拡大に伴って金文も各地に広がり、春秋時代以降は金文の字形が独自の形の篆書に分化した。特に、長江下流方面の非周民族の呉、越、楚では縦長の装飾的な字形を使っていたし、甲骨文や金文の卜辞にもあった合文（複合文字）[52]もまだあったと言う。

最初の統一帝国の成立後、中原の西方の辺境地に位置していた秦は、戦国時代の自国の字形（大篆）を少し単純化したもの（小篆）で、強引に文字の統一を図ろうとしたが、書写材料の変化もあって実際に木簡などに刻まれたのは、もう少し書きやすく、更に単純化された字形の隷書であった。また、既に実用文字として篆書と並んで各国に存在していた隷書の方は、紙の製造普及と時を相前後して、草隷として広く普及していった。実際には、実用的な隷書と公式の篆書の二重公用文字制度[53]だったわけである。この結果、長江中流から西南に比較的古くからあった金文と関係のあるらしい「巴蜀」の文字も、秦・漢帝国時代には（他の諸国の篆書と共に）消滅していった。そして、我々は今だにこれを漢の字[54]として、印鑑などに実用の文字として使っているのである。

ところで、漢末には草隷から更に進んで、走行体の草書ができあがった。

だが、メモや速記に至便な実用本位の草書も判読には往々にして困難が伴うためであろう、やはり漢代末期から紀元5世紀頃（魏晋南北朝）にかけて、（今、この日本語の稿の表記に使っている様な）楷書体が成立していった。そして、この楷書、草書、（楷書の書写時と草書の判読時の不便さを同時に解消する実用的な）行書と書道が一纏まりとなって、日本や朝鮮やベトナム（安南）へと渡っていったのである。無論、それらは長い間漢字の故郷との間を繋いでいた。ところが、漢字の字形面での統合状態は20世紀半ばの最近になって、分裂への道を踏み出した。中国の簡体字、日本の常用字体、朝鮮半島での正式の文字からの追放などの諸現象が、ほぼ時を同じにして起きたのである。これらの文字と表記の改革の理由は概ね同じ方向を示している。例えば、中国大陸では、1950年代に漢字を万人に開かれた文字にするために文字改革（字形の簡素化と注音字母のラテン文字化の実施）に乗り出した。どうやら、読書人による文字の独占が、西欧諸国によって清朝末期に数々の侮辱を受けた重要な原因であると考えた様子である。

今度は、漢字圏の周辺部を見よう。これには二種類あって、共に漢字と外観が似ている。一つは契丹文字、女真文字、西夏文字などといった実は漢字とは全く別の文字体系であり、もう一つは字喃や壮方塊文字といった漢字との境界線を引くのが難しい文字体系である。無論、拡大解釈をして、前者にハングル、後者に日本の「国字」を加えることも不可能ではない[55]。では、前者から見てゆこう。

唐末になると黄河付近は北方の非漢民族の支配下に入り、漢民族は江南へ避難していった。そのためであろう、結局、外来の支配者達は漢人の読書人階級と強力に手を結ぶことなく、独自の帝国統治機構を作ることとなった。文字もその一つである。そして、当時の彼等には、黄河、長江付近の文明に替わるものがなく、結局は漢字を手本として、外観の近い文字を創らざるを得なかったようである[56]。そのためか、原理まで全面的に採用してはいない。漢字に替わって、ウィグル文字やチベット文字での彼等の言語に比較的よく適う版の入手は、結果的に彼等を露払いにしたモンゴル帝国まで待たねばならなかった。ただ、政治的重心が漢字圏から比較的遠かったモンゴル帝国で、結局のところ、元来が横書きのチベット系文字（パクパ文字）の試みが失敗したのは、漢文との併書に必要な「縦書き」との折り合い具合が関係しているように思われる。

無論、それは併書する対訳文の相手に合わせて自らの字形の配置を変える契丹文字の様な柔軟性を持ち合わせなかったためだが、折り合う相手が共に縦書きの漢文とウィグル文であった遼の文書とは、必ずしも同一に論じられない。帝国の規模が違うからである。ところで、朝鮮半島のハングル文も、今では横書きを取り入れて海の彼方から押し寄せてくるラテン文字に対応しているが、曾ての契丹文字の柔軟性に倣って全文字（各字形）を横に並べる方式の併用には踏み切れないでいる。多分、ハングルのカーテンの後に潜む漢字（古典漢籍）との密接な関係に影響が及ぶのを警戒しているのだろう。少なくとも筆者にはそう見える。

さて、北方の塞外では、先ず契丹文字が10世紀に始まった。その遼を受け継いだ格好の女真人の金は当初、契丹文字を使っていたが、やがて女真文字を創った。両者共に「大字」「小字」の2種類の文字がある。契丹文字では表意の大字は字形が漢字に似ていて、中には同じものもある。実際の契丹文は表音の小字との混用で、原理的には漢字仮名混淆の日本文のようである。だが、大小の両文字間には漢字と仮名の様な視覚的外観的な差異が乏しく、現行方式よりは初期の万葉仮名式に近い。言語は蒙古語に近いアルタイ系だというから、日本人の感覚からすれば実用面に極端な不都合はなかったものと思われる。そんなわけで、契丹文字はウィグル文の原理と漢字の字形による折衷方式と言えなくもないが、そうなると同じ見解が日本文にも当嵌まる可能性が出るので、難しいところである。

女真文字は契丹文字と基本的には同じ原理に基づいていると言う。多分、女真語（ツングース系）が契丹語と同じアルタイ系であることもその理由に含まれよう。ただ、遼から金までの2世紀ほどの間に漢字に対する抵抗精神が摩滅したためか、（残存資料に乏しい）大字の字形は漢字に非常に近い。従って、それを簡単化したとされる小字の字形は日本の平仮名を思わせる。だが、単音節の音を表記する日本の仮名と違って、多音節音で読む女真小字は表意文字のようであり、日本の訓読漢字を思わせる。

西方では、河西回廊の東端からさほど遠くない塞外直下で、紀元11世紀に西夏文字が始まった。この文字には、北方の文字の様な大小の区別は無い。表意文字だけである。言語がチベット系だから、漢語文の構造に倣いやすいことは確かである。字形も或る程度はそうだが、字の構成原理は漢字に非常に近い。「六書」の原理にほぼ沿って理路整然と創られているらしいが、象

形と指事の単体字が非常に少なく、書記などの少数の専門家の使用に適した人工文字の色彩がかなり濃い。従って、西夏王国の興慶府跡に元朝の大都が建設されないことが確定した時に、この文字の将来も最終的に決定された。ただ、局地的に明朝成立後も使われ、三百年間ほどの寿命を保ったと言う。尤も、女真文字の様にして単体字形を増やし、その人工性を緩和したとしても、「西域」地方の書面国際語として長期に亙って生き残れる保証があったわけではない。

一方、渤海、黄海を越えた東方では、紀元15世紀の李朝（朝鮮）に、幾分契丹文字を思い起こさせる文字が出現した。ただ、「ハングル（大字）」と今日称されるこの文字は、全てラテン・アルファベット式の表音字であり、個々の字形も契丹小字とは遠い。無論、契丹大字に当たる表意字はないが、もし日本文の様に漢字を使えば似た体裁になろう。というのは、生まれて後五百年を経て、再び生命を吹き込まれたこの文字の生涯は、短く華々しく咲いて死んだ北方と西方の文字と好対照をなす。多分、この事情は漢字文化圏の中心部からの物理的な距離の違いによって説明するのが最も納得しやすい。というのは、国家的な援護もなかったにも拘らず、しぶとく生き続けた挙げ句の果てに、（地域的）国際文字の仲間入りの野望を抱き始めた仮名の過去を考慮に入れるからである。以上で、漢字とは主として外観だけが近い文字の話を終る。

ここで話を戻して、今度は漢字との境界線を引き難い文字の方に移ろう。さて、文字（漢字）には字形と意義と音があるが、その借用法は基本的には次の５種類（６形式）である。第1は、音（と字形[57]）だけを借りる方法で、意味は捨てるのが原則である。これは表意字が表音に転化するに際に世界中で非常に広汎に採られた方法で、(a)同一言語の中で転化する場合、(b)他言語の文字を流用する場合、がある。ここでは我々に馴染みの名を借り、前者を陀羅尼方式（1(a)）、後者を万葉仮名方式（1(b)）と呼んでおく。尚、『説文解字』の漢字「六書」原理の「仮借」は基本的には1(a)に当る。第2は、意味（と字形）だけを借りる方法で、原則として音は借り入れた言語の意味の近い語で代用する。第１の場合に倣って、訓読方式(2)と呼ぶ。第3は、字形（漢字や部首等）と構成原理を借りて、潜在的に可能な文字を新たに造る方法で、意味は原則として字形から推測できる範囲内とする。無論、音は借り入れた言語の語を宛てる。日本の「国字」（例：[峠]）で馴染みだが、

有名な安南（ベトナム）版の名を取り、字喃方式(3)とする。最後の第4は、表意字を借り出した後、字形自体を改変して自らの文字（体系）を作る方法で、片仮名方式(4)[58]とする。この外、字形と意義と音をそのまま借りてくる音読方式(5)と言う方法があり、日本語の音読み漢字語をその代表例とする。では、以上の用語を使いながら漢字圏の南方に広がる字喃系の文字を見てゆこう。

始めは、越南（ベトナム）語である。ここでは、「儒字」である漢文に加え、13世紀になると漢字による表記が始まった。これが字喃である。1(b)が主だが、字形の一部に［口］などを付け（て、［口■］を形声字とし）たり、［巴三］の様な非漢字の字形を作る(3)の方式も取っている。ついでに言えば、漢語の方言とされている広東語、シンガポールの華語にも（漢語普通話文の辞書に無い）［口■］式を始めとする字喃式の文字がある。字喃系文字と漢字圏の境界線が引きにくい所以である。さて、ベトナムと広東省の間の広西省を代表する壮（チワン）語にも宋代以来の方塊文字があり、1(b)や(3)などがある。基本的にはベトナムの字喃と同じで、本稿で言う字喃系文字である。この外、貴州省の布依（プイ）、侗（カム）、水（スイ）の語文や雲南省の白（パイ）語文も字喃系文字である。侗文や白文などには(2)もある。また、水文の場合は漢字風からチベット文字や彝文字や絵文字風の字形まであり、次に述べる南部高原の特徴も備えている。尚、これら字喃系文字は現在はほとんど使われていないようである。というのも、ベトナムは言うに及ばず、中国内の少数民族は新中国成立後の今日、政府の語言文字政策に基づいて、この地域でも景頗（カチン）、佤（バ）、苗（ミャオ）、傈僳（リス）などを含む多くの語文でラテン文字を正文としているからである。多分、以後は死文字と化してゆく可能性が高い。

ところで、日本の漢字の場合、所謂「国字」の常用漢字全数に占める割合はそう大きくない。その場合、これをどう理解するかが議論の対象となる。勿論、所謂「正式」な漢字に日本製の「異物」が例外的に少々交じっただけだとする立場もあろう。だが、日本漢字の集合が（ある時代の）中国の漢字に無い要素（set element）を含んでいると理解する方がいい。そうすれば、「ドイツ文の文字集合には、英文の文字集合に無い［ü］や［ä］がある」という立場と基本的に同じになるからである。また、他にも利点はある。例えば、現在、中国の漢語普通話文とシンガポールの華文では漢字の集合は

必ずしも同じではないし、台湾の国語文は無論のこと、香港でも違う。では、先に触れた字喃系文字はどうなのか。基本的には台湾や香港と同じと見做すのがよいと思う。違いはそこに占める共通「漢字」の比率の高低だけである。「漢字との境界線を引き難い文字」とはそういう意味であろう。

ただ、現行の日本文の場合、なかなかそう思えないのも事実である。私見では、それは仮名との混淆文のためで、漢字の輸入から日の浅かった、所謂万葉仮名時代の日本文は字喃系文字であったと考えてよい。因みに、現行の日本文は既に見たように、北方（と東方）系の特徴を備えていた。表意文字の間を非漢字字形の表音文字が埋める形で概ね文ができているからである。そう思うと、直接の因果関係は無かろうが、唐末期から華北（中原地方）に次々と侵入した契丹、女真、蒙古、満州の各民族の最後に（ロシアと共に）日本がいることに不思議を感じない。

［東アジア南部高原］

中国の雲貴高原から奥地に広がる高山地域には、長い間に漢民族に次第に追い詰められていったいろんな少数民族が住んでいる。以前からこの地域には漢字とは外観だけでなく、明らかに系統を異にすると見られる絵文字（スケッチ）風の独特の文字が分布していた[59]。更には、巴や蜀の国のあった頃から北方とは別の文字圏があった節がある。精神文化的にはボン教風の地域である。代表的なのは、自治区を持つチベット人や蒙古人を上回る数を誇る彝族の文字（ロロ文字）で、他に周辺先進地域の文字の字形を寄せ集めた様相のゴパと呼ばれる表音文字とボン教の経典用に巫師（トンパ）が使う表意文字の、二種類の納西（ナシ）文字の外、傈僳（リス）文字、アルス文字、普米（プミ）文字などがある。この内、地域差によって（書写方向は含め）３種類あった彝族の文字を束ねる目的で、最近になって創られた左右横書きの規範彝文（新しいロロ文字）を除けば、その未来は保証の限りではない。本来は縦書きだったから、規範彝文はシュメール文字の様に途中で90°回転されている。現在は平仮名式音節文字だが、曾ては表意文字だったと言う。尚、四川、貴州、雲南の中国の南部３省を跨いで分布する彝族は、（曾てと違って）その人口の大きさにも拘らず独立の省を持たない点で、中東の山岳地帯に数カ国の国境を跨いで分布する国家無き民族であるクルド人に似ている[60]。

2.10　その他の文字

解読がほとんど進んでいないとか、類似の文字が未発見だとかいった様々な理由で、世界にはまだ周囲と孤立した印象を与える諸文字がある。では、絵文字から見てゆこう。

さて、ブラーフミー文字以前の紀元前２、３千年期のインダス河方面に分布していた原インド文字と南太平洋東部のイースター島で19世紀まで使われていた文字、ロンゴロンゴの間には理由不明の字形上の類似があると言う。尤も、相互によく似た字形の対はそう多くないらしいが、共に絵文字風であり、偶然の域を越えている。また、楔形文字の前身である絵文字に似た文字が（メソポタミアのすぐ東（エラム）の山岳部にあって、時期的にも近い）原エラム文字以外に、時間的には後の旧ソ連領南トルクメン方面やインダス河方面にもあると言う。ただ、数も多くなく、互いの関係もまだ不明らしいが、この辺りに広域の文字文化圏があったということに将来はなるのであろうか[61]。

今度は、個人の努力で文字の段階に入ったものを挙げる。少数を除いて、製作者は全て土着の側にいた。多くは自らの属する地域社会が西洋やロシアと直接出会うことになった19世紀から20世紀のことである。短い間に絵文字から音節文字を経て単音文字にまで変化するものもあれば、創作者の死によって途中で止まるものもあるなど様々である。シベリアでは、チュクチ半島のトナカイの牧畜社会にあった。また、カメルーンのバムム王国の文字や、その西方のリベリア海岸のヴァイ族の文字がアフリカのイスラム地域に出現した。この内、バムムの文字は創った当人がスルタンだったため公用文字となったが、そのスルタンと寿命を伴にし、すぐに消えた。一方、ヴァイ文字は20世紀前半には西アフリカ一帯にある程度の広がりを見せていたと言う。先に見た彝文字に似た分布である。他に、中国南部の高原の傈僳（リス）族にも土着の農民の手になる文字体系があって、字形中にはラテン文字や台湾漢語の注音字母風の字などがある。尚、リス文字には他にも、ラテン文字の字形を巧みに変形利用した風変わりな文字がある。ただ、こっちの方（フレイザー文字）は外来者の手によるもので、作字法が現代の言語音声学の国際音声符号（ＩＰＡ）に少し似ている。

最後は、アメリカ大陸の文字である。中南米の文字は解読や発見が充分に進んでない現時点では、政治構造と似て中央アメリカとアンデスにほぼ二分

される。前者は十数種程と種類も多く、時期も紀元一千年期末頃を境に前後に分かれるらしい。サポテカやオルメカの文字や有名なマヤの文字は前期に属し、ミシュテカやスペイン統治まで続いたアステカの文字は後期に属す。ただ、北の高原アステカには、禁書のため資料が乏しい。一方、南アメリカでは、ボリビアやペルーの山中にはキルカと呼ばれる文字があったらしい。また、少し北のパナマ地峡にはクナ文字があった。ただ、キルカは直接には殆ど残っていないと言う。無論、禁書のためだが、原因の一端はアステカのような外来の支配者によるものとは違ったためらしい。

北アメリカでは、キリスト教宣教師による多くの文字は、結局失敗した。何とか、実際に形をなしたのは現在の北ジョージアと北カロライナに跨がった国家のチェロキー文字だけであった。字形にはラテン文字を流用したが、個人で創った文字である。多地域に亙り、些か長くなったが、この辺で本章を終わる。

3．世界帝国と公用文字

さて、稿の冒頭で、筆者の日頃接する外国人留学生が（幼少年期を通じて自らの身に着けた言語ではなく）半ば無意識の内に英語を基準として日本語を捉え、その表記法を批判する傾向があることを指摘した[62]。日本人の場合でも、英語を欧州語に読み換えれば同じことが言えた時代が、つい最近まで続いていた。無論、根拠は純技術的なものではない。もしそうであるなら、モンゴル帝国の時代の状況は勿論、東から西にかけてのユーラシアの広大な領域に並んだ、清朝（満州語）、ムガール帝国（近代ペルシャ語）、オスマン帝国（オスマン・トルコ語）の諸語が基準だった頃の状況を合理的に説明することが難しくなるからである。

ところで、この傾向には、近未来の世界における英語・英文の将来性に関する個々人の読みや期待が色濃く反映されている。即ち、これらの人の大半は、心情ではともかく、知性のレベルでは今から自らの人生の寿命の尽きるまでの期間に、英語・英文が極めて重要な個人の栄達手段に次第に変わってゆくという自信ないし信仰がある。人に依っては、（今はまだ一部に限られている）国家元首や首脳級政治家間の会話や会談も（公式の会議以外では）通訳を挟まずに英語で行なうことが極く普通になると見ていることだろう。だからこそ、使用人口で圧倒的に第１位の漢語・華語の使用者までが、それ

より遥かに劣った数で2位争いをしている英語・英文の習得に熱心になるのである。

ところで、以上の様な、英語・英文が世界ないし世界規模の帝国の公用語・公用文字になる日が遠くないという予想にはどれほどの信頼性があるのだろうか。無論、先の話であるから、結果を確かめる術はない。だが、過去の事例を振返ることは有益であろう。無論、筆者には各例に亙って悉さに観察する力はないが、概観するだけなら或る程度できるし、ことの性格上却って望ましいとさえ思えるので、以下でいろいろ見てゆく。

さて、過去の世界帝国[63]では公用文字（公用語）が複数あるのが普通のようであり、古代エジプトの「中王国」のヒエログリフ、徳川幕藩体制下の日本文、モスクワ大公国からロマノフ王朝頃までの大ロシア語キリール文字の様な場合は例外的である。つまり、この場合は結果が誰の目にも明白で、実際には帝国政府の権限で何か別のものを選ぶということなどは論外だったようである[64]。ただ、秦・漢帝国、ウマイヤ朝、中米のヌエバ・イスパニア（新スペイン）とインカ帝国を継いだ南米ペルーの副王領の場合の公用文字は小篆（と隷書）、アラビア語文、スペイン語文の各一種類ではあったが、それは帝国建設者が自らの意志で選択したもののようである。というのは、秦・漢帝国では中心地域の言語の等質性を利用して文化の先進地域（中原地方）の篆書を採用する道は当然あったし、ペルーでもインカ帝国時期に既にその地位を得ていたケチュア語に文字を与えて実質的に踏襲する道もあったはずである。それは、残りのものにも当て嵌まり、ウマイヤ朝では王朝成立直後の紀元7世紀後半の半世紀間を実際そうした様に、旧ローマ帝国領ではギリシャ語を、また旧サーサーン朝領ではパフラヴィーを公用文字として、そのまま存続させ続けることもできたのである。特に、秦の始皇帝の焚書は明確な意志による選択の好例である。尚、2.3節で触れたクレタ＝ミュケーナイ文字の絵文字A，Bから線文字Aへの不連続的な移行もその可能性が無いとは言えないらしい[65]。

次は複数の公用文字が通用している場合である。これに実際上の公用文字も含めれば、これが一般的な姿である。例えば、インドのムガール帝国の公用文字は（帝国建設者のチャガタイ系トルコ文ではなく、同じ）アラビア系文字のペルシャ語文であったが、その後継者争いにおいてデカンのマラータ王国に競り勝ったイギリス帝国は、公用文字に自らの英文を指定すると同時

に、民衆各個人に関する分野に限ってウルドゥー語や半人工言語のヒンドゥスターニー語（ヒンディー語）などの土着の言語の使用を認めた[66]。ある程度似た事情は、西ヨーロッパのナポレオン帝国でも見られた。無論、ここでは、フランス語がイギリス・インド帝国での英語に当り、土着の公用文とはイタリア語、ドイツ語、オランダ語等を意味する。ただ、この帝国は短命に終わった。だが、その変形再来の観が強い現代のヨーロッパ連合（ＥＵ）には発足を目前にした現在でも曾てのフランス文の様な中心となる公用文が定まらず、筆者の様な傍観者には混乱の極みに映る。

一方、一時期フレンギースタンの世界帝国になりかかったドナウ河流域のハプスブルグ帝国（神聖ローマ帝国）も似たような状況にあって、ドイツ語文一色に塗り潰すことは結局できなかったし、オスマン帝国も民政面では、公用文字であるオスマン・トルコ文以外のギリシャ文（正教キリスト教徒）、アルメニア文（グレゴリウス派単性論）、アラビア文（イスラム教徒）等の使用を認めていた。

話を少し古い方に移そう。ローマ帝国がギリシャ語コイネー文とラテン語文の「二言語」が公用文字であったこと、また帝国の全域に亙ってこの二つが均等であったわけではないことは既に述べた。例えば、北アフリカ西部の曾てのカルタゴの勢力域は（ベルベル語を追い払って地位を得た）フェニキア語を同じようにして内陸の奥地に追い払ったラテン語文の支配域となったし、エジプトはプトレマイオス朝期に引き続いてコイネー文とヒエログリフ及びデモーティックの言語との併用を保った[67]。また、メソポタミアのウルの四界帝国（シュメール・アッカド帝国）でも、公用文字はシュメール文とアッカド文であった。

他方、ハカーマニシュ朝の公式文は（ビーソトゥーンの碑文にある様に）巡回移動する三都の言語、エラム文（スーサ）、アッカド文（バビロン）、古代ペルシャ文（エクバタナ）であったが、実際にはこの帝国には幾つかの文字が民衆への翻訳伝達用として非公式に存在したらしい。もしそうなら、イギリス・インド帝国と幾分似た状況である。例えば、エーゲ海沿いのギリシャ文字やエジプトのヒエログリフとデモーティックの文字がそうであり、メソポタミアの低地でエラム文やアッカド文に替わって事実上の公用文字となったアラム文がそうである。その結果、後には人工的に創りだされた古代ペルシャ文も結局はモンゴル帝国のパクパ文字の様に、あまり長く続かない

で帝国とその運命を伴にした。ついでに言えば、清朝も公式文は漢文とモンゴル系語文と蒙古文を改作した満州文の三つであったが、帝国規模で見れば満州文と漢文、中でも漢文が重要であった。

この外、(幾らか違うが) 同じ範疇に入るものにマウリア朝マガタ帝国やペルーのスペイン帝国の場合がある。マウリア朝では（言語の数は多いが）アショーカ碑文がブラーフミー文字とカロシュテイー文字の双方で書かれたし、スペイン帝国でもインカ帝国時代の公用語のケチュア語がキリスト教（ローマ・カトリック）の布教に積極的に使用されたため、実際にはスペイン語との併用に近いように見える。

ところで、ここまで実情を見てきた大帝国の公用文字の中には、帝国の建設者・支配民族の語文が含まれる場合もあれば、そうでない場合もあった。そこで、今度はそれを見よう。やがて形を現すことになる我々の世界の公用文字を占う手掛かりになるからである。さて、モンゴル帝国を創ったのは勿論、モンゴル高原の諸部族の連合体である。だが、開国の祖チンギス汗の死後あまり日を経ずしてこの大帝国は実質的に分裂した[68]。その公用文字は元朝が漢字であり、イル汗国がアラビア系文字（近代ペルシャ語）であった。チャガタイ汗やバツー汗の系譜の支配者達もモンゴル語を捨て、自領の従属民の使うトルコ系の言語に切り替えた。また、ムガール帝国のチャガタイ・トルコ文も、建国者バーブルがヒンズー・クッシュ山脈を越える前に、既に先祖のティムールがサマルカンドに興した王朝によってこの大帝国の経営に耐え得る文字の資格を獲得していたにも拘らず、公用文字の仲間に入れることを放棄した。

ところで、この態度はイギリス・インド帝国へのラテン系文字（英語）の持ち込みと好対照をなすが[69]、清朝と満州文字の関係とは似ている。ただ、満州文字はできて日も浅い上、漢人が大多数を占める世界帝国の経営に当る準備がまだ整っていなかったから、必ずしも同列に論ずることはできない。似た例は古代にもあった。例えば、秦・漢に対する隋・唐の様に、楔形文字の世界でウルの四界帝国を再興した格好のバビロンのアモル王朝の公用文字はアッカド文だけだったし[70]、紀元前一千年期の前半に新バビロニア帝国を創ったカルデア人は、当時のその地域一帯の実質的な公用文字と化し始めていたアラム文字ではなく、政治的な抵抗相手のアッシリア文（アッカド語）を公用文字とした[71]。

世界帝国の公用文字の話に続いて、現在の英語がその様相を帯始めているリングヴ・フランカの話に移ろう。またそれは、世界帝国の公用語の多くがリングヴ・フランカ的な要素を備えているからである。さて、ハブスブルグ帝国は陸軍の指揮用語はドイツ語だったと言う。帝国の支配者の履歴を考えれば尤もな話である。だが、海軍の指揮用語は、曾て繁栄を誇ったイタリアの都市国家間の共通語であったイタリア語のトスカナ方言風のものであり、同じことは高級官吏・将軍（宮廷奴隷）の共通語がセルボ・クロアティア語だったと言うオスマン帝国の海軍にも言えた。要するに、当時の東部地中海の、特にレバント地方に押し寄せた、（ピサやフィレンツェのあるトスカナ地方とは異なった地方から来た）ウェネツィア人やジェノア人を、オスマン海軍はこのフランク人（西欧人）の使う混成国際語（lingua franca）を使いながら追い払ったわけである。しかも、この言葉は北イタリアの諸都市が国家としての独立を喪失して凋落した19世紀にもまだ使われていたと言う。それは、ちょうど現在の民間航空機の交信用語が英語であることに相当し、大英帝国が北海の小さな島に戻った今日も益々使用領域が広がっていることの先例をなしている。

ヨーロッパで次に登場したフランス語は、始めはイタリア語トスカナ方言より通用地域が北に偏り、重心はアルプスの北側にあった。だが、ブルボン王朝期前後から地理的領域を拡大し始め、短命だったナポレオン帝国を通してほぼ全ヨーロッパに広がった上、ついにはロシア帝国、スペイン帝国（中南米）、オスマン帝国（中近東）の隅々までもその混成国際語の通用領域に加えた。後を追ってきた英語の前に破れ去ったことが明白になったのはつい最近のことである。従って、筆者などでもそのフランス語風の混成国際語を直に耳にする機会に接したことはあるが、多くの場合その通用地域の拡大と引き替えに言語としての卑俗化を容認したことは明白であった。

では、他にはどんなものがあるのだろうか。紀元前一千年期の半ば過ぎ頃に輝きを放った古典期のギリシャ語アッティカ方言は、イエスの誕生の前後からローマの西半分が瓦解する頃まで人工言語として復活したにも拘らず、結局はギリシャ語世界の国際語にはなれなかったと言ってよい。そうなったのは、現在も正教キリスト教会の礼拝用語として残っている、キリスト教を運んだコイネーの方だったようだ。もしそうだとすれば、サンスクリットが結局はプラークリットに勝ったと言えるインドと違う結果に終わったことに

なる。この原因はどこにあるのだろうか。勿論、決定的なことは不明だが、ヘレニズム世界では古典期のギリシャ語のアッティカ方言の模倣物が知識人用の学術著作用などに留まったのに対し、インドのサンスクリットはプラークリット語から仏典などを多く奪ったり、パーリ語仏典を亜大陸から追い出したりしたことが関係していることは多分確かであろう。

話は些か前後するが、次にリングヮ・フランカ諸語（母語の地域を超えて広大な地域に通用する補助語）の特徴を見よう。さて、洋の東西を問わず、大衆は母語以外の言葉を知らないというのが通則である[72]。だが、それには少なくとも時折かつ常態的に起きる次の二つ現象が伴う。即ち、一つは母語に関する言語地図の書き替えであり、もう一つはその際に侵入語が母語域を遥かに超えた広い地域の知識人の間の媒介言語と化すことである。例えば、旧約聖書の一部がヘブライ語でなくアラム語で書かれていることは前者の例であり、ハカーマニシュ朝後期の帝国西部諸州全体におけるアラム語が後者の例である。というのは、当時アラム語は、それを母語としないエジプトやアナトリアを含む広大な地域の非公式かつの実質的な公用語だったからである。従って、上記の二現象の内、二番目がここで取り上げるリングヮ・フランカ諸語に関することである。

ところで、リングヮ・フランカと似たことが文化現象にも見られることは周知のところである。柔道を始めとする日本発祥の競技の最近の国際大会を見ているとそれがよく分かる。例えば、柔道試合終了後のお辞儀をした後、互いに歩み寄って握手をする。多分、「礼」の意味を分かりたくない連中が始めたことと思われるが、この「柔道」側にとっての堕落現象も“judo” side から見れば自ら存在意義を示す抵抗姿勢であろう。柔道は制度面でも、体重別制を採用し、実質的なポイント制と化しているが、欧米に広がる過程で、アマレスか何かの一種として受け入れられたのであろう。他にも、世界大会と銘打った相撲の試合で外国人競技者が「まわし」の下に運動用の半パンツを穿いているのを見た記憶がある。そして、リングヮ・フランカも過去の結果に遡る限り、基本的にはそれと同じ類ものであるらしい。

言い換えれば、限られた地域を持つ或る母語が広範囲で流通するリングヮ・フランカに変わるには、政治的ないし経済的な大勢力を擁した民族の実際的な手段であった過去の過程の外に、結果においてその母語者が拘る微妙な感触を捨て去ることが求められるようである。曾て、古い漢語の無気子音に

存在した清濁の区別（例：［p］／［b］）が、隋・唐の世界帝国の後に遂に消滅したのは、詰まる所そういうことであろう。そして、この種のことは、基本的には、母語との言語的な遠近に拘らず存在するもののようである[73]。では、実例に即して見てゆこう。

始めは現代世界に散在するその兆候ないし痕跡からである。例えば、現代の南アフリカ連邦で、曾てのユグノー教徒の系譜の者が使うアフリカーンス語は名称までオランダ語とは異なってしまったにも拘らず、（専門家を除けば）特に強い抗議は出ていないようである。従って、それを当事者や周囲の者の現実感覚と掛け離れていない証拠と受け取ることは可能である[74]。

では、歴史的に有名な例の方に話を移そう。ギリシャ語アッティカ方言はマケドニア宮廷を経由してイエス誕生前後にはインダス河東岸のパンジャブのギリシャ人公国の官庁にまで進出していたが、その混成国際語はプトレマイオス朝下でユダヤ人の手によった旧約聖書の『七十人訳』（ＢＣ３世紀）や『新約聖書』と同類のコイネーだった。

一方、ラテン語は基本的に後にローマ帝国建設の中核となったラティウムの都市国家ローマの軍旗の跡を追って広まり、紀元直前頃にはライン河西岸のローマ軍の駐屯地で使われていたと言う。その結果、古典ラテン語は帝国西部諸州のスラムや強制作業場なども通じて帝国崩壊後も生き残り、今から数百年前にフランス語と交替するまで命脈を保った。だが、その形は次第に変わり、当初の形体に比べてかなり変則的なものになっていた[75]。

古代エジプトでは、「新王国」のフォラオ・イクナトンの時期に忽然と、既に「中王国」の時代には公用語になっていた古典エジプト語に替わって、当時の口語が公用語かつ文学語になった。極めて短命だった彼の宗教面での直接の改革の成果に比べ、結果としてその試みは歓迎された。それは、元朝期の前後に幾らか花の咲いた感のある中国の白話体よりも影響は永続的で、その後も古典語は決して復活しなかった。そして、この古典エジプト語と新エジプト語が中国での例から類推してリングヴ・フランカ風の特徴を持っていたとしても何の不思議もない。

メソポタミアの楔形文字圏では、アッカド語はアモル王朝の後には本来のシュメールの地域にも日常語としても浸透し、エラムでも四界帝国に編入後は公用語になった。だが、アッカド語が混成国際語としての真価を発揮したのは、この地域の世界帝国の崩壊から紀元前二千年期末までの非セム系言語

を話す支配者達に分割統治された時代に、この地域の共通語として生き残ったことであった[76]。それは、ちょうどローマ帝国の西半分の崩壊後のラテン語や五胡十六国時代の中国北方の漢語の様な状況に似て見える。

インドで、マウリア朝マガダ帝国期に混成国際語の地位を争った言語は、アショーカ碑文に示されている幾つかのプラークリット語[77]と見られるが、他にも後にスリ・ランカで多量の南伝仏教の経典を生み出したパーリ語や、チベット高原の北方の東トルキスタンで紀元3世紀頃に行政手段に使われたカロシュティー文字の言語などもあった。

東アジア大陸には、北京官話と称される有名な混成国際語がある。隋・唐帝国以来の（時折の混乱を挟む）政治的統一に伴って次第に四方に広まり、近年では「普通話」は江南地方でも少なくともリングヮ・フランカ風の機能を持つに至っている。だが、それもまだ中国国家の国境線内に限られていると見た方がよく、（台湾はともかく）東南アジアを中心に分布している江南出身の華人のリングヮ・フランカとしては英語と覇を競ってはいるが、やや劣勢状態にあるというのが真相に近い。ただ、東アジアには昔から漢字という視覚的なリングヮ・フランカ（非公式の公用文字）があり、これを軽視すると現実認識を誤る恐れがある。これが、時には重複することを知りつつも本章で公用文字と混成国際語を別々に扱っている理由である。

近代ペルシャ語と通称されるアラビア系文字のペルシャ語は、遅くとも13世紀には大帝国の文学や行政を支え得る言語として自立し、一時はオスマン帝国のブダ・パシャ管区（ハンガリー）からインドのデカン高原までの広大な通用地域を持つ一大混成国際語になった。というのは、そこに東から西にかけて、トルコ系母語の帝国建設者を持つ三帝国（インド・ムガール帝国、サファビー朝ペルシャ帝国、オスマン帝国）が並んだためである[78]。無論、リングヮ・フランカとして栄えた代償に近代ペルシャ語は卑俗化した。その程度は19世紀前半にそれを継いだ英語の受けた卑俗化と同じようだと言う。また、これらの地域の支配者達はトルコ語とペルシャ語の混成言語を作って広めた。それが、ウルドゥー語（軍隊語）であり、オスマン・トルコ語である。ただ日本語に漢字の語彙が溢れているのとは少し違って、非征服者の諸言語の影響も受けているのである。ところで、これと似たような混成言語は東西アフリカにも生まれた。それらは皆、アラビア語リングヮ・フランカが関係しており、アラビア文字で書かれた。東アフリカのものはスワヒリ語、

西アフリカのサハラの南のはフラニ語とハウサ語と言う。

インカ帝国は統治のために、自らの言語と異なるケチュア語を選び、従属民に強制したと言う。その後を継いだスペイン帝国は、ケチュア語がカトリック教会によって積極的に利用されるのを認める傍ら、スペイン語リングヮ・フランカを広めたが、結局それがリオ・グランデ河以南の広大な中南米域に通用地域を持つ混成国際語となって、今日に至る大きな原因となった。尚、中央アメリカには、ケチュア語の様なスペイン語リングヮ・フランカのための露払いをする言語はなかった。尚、ロシア帝国や旧ソ連邦ではクルジアなどであっても、大ロシア語リングヮ・フランカが通用していることは周知のとおりである。また、アラム語については公用文字のところで述べたことに重なるので省く。

ところで、この混成国際語という代物は厄介なもののようである。特に、現代はその感がある。高等教育を受けようとする場合などがいい例で、どの言語を選ぶかで人生が決まってしまうからである。(無論、日本などの様に実際には選べない場合が多いのは事実である。) 例えば、シンガポール華人の場合ほんの二、三十年前までは英語か漢語かの選択が実質的にも可能であった。だが、嫌々ながら英語を選択させられたものは社会で優位を得、嬉々として漢語の学習に向った者は社会から実質的に抹殺されることとなった。しかも、原因は単なる親の気紛とあっては堪ったものではない。

また、これに関しては、他にも目に付くことがある。それは、もともと武力でその意に反して押しつけられた場合が多いリングヮ・フランカなのに、曾ての被害者やその子孫の中で、その忌まわしい記憶が現実の利便性の前では実に見事に消えてしまうことの不思議さである。今、仕事で相手をしている留学生も、また曾て筆者が滞在していたアジア・アフリカの国々の一部の人々もそうであったが、自国を侵略したり搾取をした旧宗主国やアメリカを非難するその同じ口で、英語などの欧州語で得た旧宗主国やアメリカの論理でものを見て日本や日本人を無闇に非難するのを聞くと、一種独特の奇妙な気持ちになる。増して、母語訛りの強い早口の英語を得意げに振り回して、「口撃」されれば尚更納得し難い。この種の人を「インテリゲンツィア」と普通は呼ぶのだろうが、筆者にはこのロシア語の語尾の付いた奇妙な合成語の名が体を表しているように思えてならない。

4．結

ここまで、「文字圏の文明史」とでも言うべき観点を中心に据えて、古今東西の世界に展開された文字（表記形式）の実相について見てきた。だが、個別の文字体系や文字圏の詳細な記述を扱ったものではない。それどころか（読めば直ぐ解るように）その種のものとは程遠いとさえ言える。勿論、それに興味がないわけではない。にも拘らず、筆者が（試論ながらも）本稿で目指したのは、①古今東西の文字をほぼ同一の基準下に纏めて取り扱ったらどういう結果が得られるのか、②現在の世界では極めて特異な漢字仮名混淆文という表記形式に馴れ親しんでいる日本人にはこの世界はどう見えるか、ということであった。

その内、①に対する筆者の答えは概ね、第2章と第3章に書いた。一方、②については（第2章などで折りに触れて述べはしたが）纏った答えをまだしていない。そこで、次にこの問題に簡潔に触れておく。さて、現行日本文は外国の語彙を文字ごと借りてきたものと日本で創った仮名を混ぜて使う方式の表記法を採っている。別段、漢字語は使わなくても構わないが、大抵は使う。理由はいろいろあるし、人によっても違う。漢字語の読みも、熟字訓に宛字、音訓乗り換え、漢音、呉音等々と、実際にはかなり自由度が認められているようだが、そうなる理由の中には「権威」の象徴という面もある。それは、筆者が義務教育中に経験した国語教育の実態や、種々の公務員試験問題等における漢字の（その利便性を帳消しにしている）「読み」の複雑さからも窺える。

ところで、表意文字と表音文字の或る程度自由な混用を認めている言語は他にもあった。それは第2章で触れたところであって、東アジア文字圏内は勿論のこと、楔形文字圏でも古代エジプトでも見られたし、東地中海周辺の地域にもあった。それは、冒頭の目次の2.1～2.9節の内、実に半数近い文字圏に見られるから、決して特殊ではない[79]。

これに対し、一般に「文字」というものは、絵文字から線文字の表意文字の段階を経て音節文字に変わり、最後には単音文字の段階に行き着いて完成するという見方が根強くある。確かに、2.4節から2.7節を占めるアルファベット系の文字の勢力は大きい上、2.1節から2.3節の文字は既に死文字と化しているからそう見做したくなる誘惑に駆られるのは故の無いことではない。だが、そう見るには幾つか条件が付く。

例えば、使用人口が巨大な上、政治的・経済的にも侮りがたい勢力を持つ漢字圏の人々が日頃から重宝している道具（漢字）を、その術に通じる能力を会得できない者達が、それは発展の止まった未成熟なもの、何れは消えてなくなるものと断定して意識上で切って捨てることがそれである[80]。また、その分担金が無ければ、国連の円滑な運営が覚束なくなるような経済大国、日本の教育の手段（漢字仮名混淆文）を、例えば数千年前に地球上から消え去った古代の軍国主義国家（アッシリア）の「原始的ないし不可思議な表記法（表意・表音文字の混用文)」と一緒だと勝手に断じて、奇形の様に見做すことも必要である。他に、(2.8節関連で）巨大な使用人口を誇るインドの文字が基本的に音節文字であることを何とか論理的に昇華する必要もある。(そうでないと、完成形式の単音文字とは実際にはアルファベット系だけを意味することになり、単なる好みや愛着の話に転化しかねないのである。)これには、[子音＋ａ］を表す基本の文字の［ａ］が（外来語の輸入時などに）摩滅しがちなことを好意的かつ過大に解釈する方法で乗り切ることも考えられるが、やはり苦しい。無論、探せば英文やフランス文の表意文字化の様な問題もまだある。まあ、何れにしても、「先に結論ありき」の印象が拭えない。いかがであろうか。

今度は日本の文字の複雑性に話を移す。というのも、漢字は勿論、仮名も複雑で覚えにくいという話が学習者の口によく上るからである。では、本当に不慣れ以上の確固たる理由があるのだろうか。先ず、漢字については多分それが、常日頃使っている我々の実感ともあまり掛け離れていないだろう。そこで、いろんな文字体系が凡そ何本の線（画数）から構成されているかということに関してデータを取ってみたところ、その平均値（＝μ）（＜　＞内：全文字数）で次頁の結果＜表１＞を得た[81]。そして、これから少なくとも次のことは言える。即ち、

(a)単音文字は、3.0～5.0本の（直）線からなっている。

(b)仮名は音節文字ではあるが、特に字形が煩雑ということはない。特に、片仮名は単音文字より少ない線（簡単な図形）でできているし、基本的な字数も50程度だからキリール文字などの単音文字と比べて極端に多いわけではない。

(1). 楔形文字

アッシリア文字①<482字：表意+表音>μ＝8.4，②<96字：基礎的音節文字>μ＝5.6／

アッシリア文字<常用299字>μ＝6.3／

古代ペルシャ文字<37字>μ＝3.8／ウガリット文字<30字>μ＝3.1／

(2). 古代エジプト文化圏

メロエ文字（デモーティック書体）<23字>μ＝4.0／コプト文字<31字>μ＝3.8／

(3). 東地中海周辺

ハッティ聖刻文字<54字：音節文字>μ＝7.7／

クレタ線文字Ｂ①<90字>μ＝7.3／②<59字：仮名式音節文字>μ＝6.2／

キプロス文字<55字：音節文字>μ＝4.3／グブラ文字<72字：音節文字>μ＝4.5／

(4). フェニキア系諸文字（セム語）

シナイ文字<21字>μ＝4.7／フェニキア文字<22字>μ＝3.6／

ヘブライ文字<22字>μ＝3.1／パルミラ文字<22字>μ＝3.7／

シリア文字<21字>μ＝3.3／古代南アラビア文字<29字>μ＝4.5／

アラビア文字<28字>μ＝4.3／アラム文字<22字>μ＝2.9／

(5). フェニキア系諸文字（印欧語）

ギリシャ文字①<21字：初期字体>μ＝3.5／②<24字：標準字体:東部型>μ＝3.4／

エトルリア文字<20字>μ＝3.3／ラテン文字<23字>μ＝3.3／

ウンブリア文字<19字>μ＝3.2／ルーネ文字<24字>μ＝3.2／

キリール文字<43字>μ＝4.0／

(6). 東アジア

彝文字<819字：音節文字>μ＝6.6／

漢語注音字母（台湾式）①<39字>μ＝3.4／②<1288字：音節文字式>μ＝8.7／

ハングル①<24字>μ＝2.9／②<1280字：音節文字式>μ＝8.5／

日本文字（万葉仮名）<198字：>μ＝9.5／

日本文字（平仮名）①<50字：五十音図文字>μ＝4.7／

②<108字：モーラ文字式>μ＝6.6／③<228字：音節文字式>μ＝8.5／

日本文字（片仮名）①<50字：五十音図文字>μ＝2.9／

②<126字：モーラ文字式>μ＝4.9／③<245字：音節文字式>μ＝5.5／

(7). インド系文字（参考）

タイ文字①<106字>μ＝8／②<1024字：音節文字式>μ＝16／

<表１>

実際、中国、台湾、韓国だけでなく、仮名と基本的な文字原理が似ているインド系文字圏からの留学生は仮名にはあまり抵抗を示さないから、現実的な裏付けがあると見てよかろう。ただ、他方でこの表は英語（ラテン文字）などに比べて現実のモーラ単位での仮名が煩雑であることも示唆している。しかし、英語などは仮名と違って表意文字化しているので[82]、語のレベルで見れば必ずしもそうとは言えないのである。

そして、結局、漢字が残った。読みは言うに及ばずである。字形も表1の日本の万葉仮名を平仮名やカタカナの五十音図式と比べれば分かるように、確かに煩雑である。機能がかなり似ているからそう言っていい。ただ、現代文での用法は訓読漢字は無論のこと、音読漢字と雖も単なる表音ではない。意味も運んでいるから表語文字であり、アルファベット系文字で言えば基本的には語（word）に当たる。従って、漢字を覚えることを英語などの語を覚えることに対応させるなら、漢字の学習を性急に好悪の感情に訴える必要が解消されることは確かである[83]。

さて、本話題もほぼ尽きた。最後に近未来の地球大の世界における、公用文字とリングヴ・フランカのことに触れて本稿を終わる。既に触れた如く、英語が、この世界の混成国際語になりかかっているという漠然とした感情があることは否めないところである。国際書面語としての英文がこの後を追うという見方もある。無論、個人にとって第一義的に重要なのは「やがてそういう時が来るか否か」ではなく、「各個人の残された寿命の尽きる前に、そうなるか否か」である。インド亜大陸の国々やシンガポールなどでは英語は勿論、英文でさえ既にそういう時代に突入しており、エジプトでも英語に関してはその兆候が見える。一方、日本ではまだ英語・英文共にまだその兆候は見えないと言ってよい。幾らか象徴的に言えば、「英語のできない者が、できる者を顎で使っている」職場が少なくない。更に言えば、（一部の職場を除いて）概ねまだ「英語はチャラチャラと使うもの」と見られている節がある。

筆者は日本でも英語・英文は何れ必需品になると思うが、いつの頃かは分からない。多分、筆者の生存中ではないだろうというのがせいぜいである。従って、近未来の世界で英語・英文が第3章で見たどのタイプに近くなるかは検討も付かない。ただ、リングヴ・フランカの英語は所謂イギリス英語の系譜のものではないだろう。それは世界の今の現実からして明らかである。

しかし、アメリカ英語（米語）が、曾てのアレクサンドロス後のヘレニズム世界のコイネーの役割を担うとも決まってはいない。

では、（実際上の）公用文字の方はどうだろうか。第3章で見たように、過去の例は複数の場合が多かったが、今回も英文一つに限らないのではなかろうか。既に、その兆候が見える。別段、曾てロンドンなどの街角に漢字の看板が溶け込んでいるのを見かけたせいではない。漢字は既に（曾てアラビア数字と呼ばれ、今は算用数字と呼ばれる）ヨーロッパ式数字の後を追っている様な気がしているからである。勿論、算用数字は数学の記号や化学式の仲間であり、（広義には）赤緑黄の交通信号や交通標識の仲間ではあるが、益々複雑化する世界規模での日常生活の公用の文字の代替物である。漢字の一部は既にその方向に向かい出しているように思われる。

その上、漢字は既に漢字圏に住む十数億人の現実の公用文字（母語文字）であり、中国大陸からの移民が散在する世界各地の港町では浸透を開始して既に久しい。特に、東南アジアでは既にリングヮ・フランカの文字の版になっているという現実もある。確かに英文とは現時点での用途が違っていて、公用文の文字ではない。だが、弱点があるのは英文も同じである。英文の弱点は、使用人口が、漢字はもとより漢語（中国語）に比べて圧倒的に少ないことである。そして、この弱点だって克服するのが容易ではないというのが筆者の見解である。無論、そこには一つの文字圏が他の文字圏を衝突と格闘の末に飲み込むのではなく、相当程度に完成された文字体系同士の平和的な共存の方が望ましいという個人的な願望も含まれていることは否定しない。

付記

尚、参考文献表は特に付さない。理由は二つある。一つは特定の強いものが無いことであり、もう一つは事実関係の確認のために利用した文献が多種に亙る上、かなり長期に亙って準備した本稿のための多量かつ雑多なメモ書きの出所リストが手元に無いことである。ただ、それでも稿の最終段階で、＜西田龍雄編（1981）『世界の文字』大修館，東京＞をよく利用したので、ここに記しておく。

<注>

0）筆者が曾て東北大学文学研究科に提出した修士学位論文「言語表記における文字についての研究」の中に、「現代日本語表記の位置」という副題の付いた章があった。本稿はそれを基に加筆訂正したものである。

1）漢字圏の一角を占める現代日本文の表記法が身に着いた者の観点である。

2）例示にはアッシリア書体を採用した。単なる便宜のためで、他意はない。

3）詳細は鹿島英一（1993）「文字の幾何学的特徴」『東北大学言語学論集』第2号，にある。尚、古代ペルシャ文字には左右対称の字形は無い。

4）伝統的なエジプト史の用語を借用した。

5）上段がヒエログリフ、下段がギリシャ文字のギリシャ語文で、中段がこのデモーティック書体である。

6）ヒエログリフは母音を表記しないので、単子音文字は音節文字でもある。また、限定符もそのために生ずる同音異義語を区別するためだという。

7）同じ文字を繰り返して印字できるものという意味である。

8）1950年代にベントリスによって解読され、ギリシャ語の方言と判明した。

9）キプロス文字の使用時期は一応、紀元前7世紀から2世紀とされている。従って、ストア派の祖ゼノンが生まれた頃にはこの地ではまだ使っていたのだろう。

10）介音と韻尾音の無い<声母＋核母音>の漢字と言う方が適切である。

11）ギリシャ人がエジプトからパピルス紙（ビェブロス）を輸入したために後代にはこの名の方が有名。

12）旧約聖書の「ヘテ人」はこの絵文字を使った本物のハッティ人のことであるらしい。尚、帝国統治者の自称はハッティではないと言う。

13）後期の文の解読のきっかけとなったタルクムヴァ印章も二言語文の併記である。尚、言語的には楔形文字と聖刻文字の言語は同系であるという。

14）今の日本人は逆で、「いろは・・」でなく「仮名」を通称にしている。

15）頭音法によりヒエログリフを転用<牛（セム語：アリフ／エジプト語：アウァ）を［'a］に、家（セム語：ベト／エジプト語：ペル）を［b］>したと言っても数は多くない。シナイ文字も単なる可能性に過ぎない。

16）一部はポルトガルやイギリスやロシアによって途中から東に逆流した。

17）漢字が死文字になる可能性はもうないだろう。もし南アジア周辺に分布するブラーフミー文字がアルファベットと無関係なら失敗は既に明らか。

18）主に、シェバの女王が統治したとされるヤマン（イェーメン）である。

19）アラム文字の変種からナバテア文字への過程はそう明らかではない。

20）中国大陸では元朝の頃までに口語（白話体）文学が芽を葺いたが、人工言語の「文言」の壁を破って現実となったのは20世紀のことである。

21）基本的にはアラム文字の書記官はアラム人、アッシリア語はアッシリア人である。

22）現代の研究者が読む場合、アヴェスタ語やサンスクリット語の知識がないと理解が困難であることからもそれが分かる。

23）中世パルティア語は古代メディア語と同系だと言う。独自の碑文があまり発見されていない古代メディア語の語彙は（中世ペルシャ語と同じファールス地方起源の）古代ペルシャ語の碑文中に比較的多数散在している。

24）景教シリア文字起源説もあり、アラム文字から直接派生したかは確認できないと言う。

25）要は、ギリシャ文字文化圏のキリール系文字＋グラゴール文字のセットのような位置を占めているということである。その際、強いて対応関係を挙げれば前者が縦書きウィグル系文字で、後者がソグド文字となる。

26）コーランや少年向き教科書などに母音符号を振るという、現行の工夫も実際にはアラビア語などの一部の言語に限られており、充分ではない。

27）ナバテア文字はシナイ半島方面に、アラビア文字はかなり北方のシリア・パレスティナ地域に分布していた。

28）メッカに文字が知られ始めたのは7世紀頃で、書体はアラビア湾に近いクーファ体だと言う。メッカには、シリアから直接ペトラへ南下してからヒジャーズ北部を経由する経路以外にもあったと言う。

29）母音と不定名詞語末のヌーンには、赤、黄、緑などの色彩による弁別も利用したと言う。

30）或いは、ソグド文字もそうであったかもしれない。

31）マグレブは24音階（ヨーロッパのピアノの鍵盤を倍にして）使うなど、今でも東のアラビア（微細な音階）とは異なる独自の文化を持っている。

32）中国語普通話と回族の言語は、語彙面を中心として、音声言語としては異なるとする見方も成り立つ。

33）少し長い目で見れば、例えば漢字の繁体字よりひょっとしたら未来は明るいかもしれない。

34）この紀元前一千年期前半の文字は、原理は母音文字を持つなど独自方式だったが、字形と書写方向はフェニキア式ないし非ギリシャ式であった。

35）カロシュティー文字のインド進出に道を開いた帝国のもう一つ公用語だからあり得る話ではある。その場合の原理は古代ペルシャ文字式である。

36）ジャワやマレー半島南部はバリ島などの一部地域を除いて既にアラビア系文字と（ギリシャ系の）ラテン文字との争奪戦の対象に移っている。

37）（同じアラビア文字中の）ナスターリーク書体とマグレブ書体でなく、グジャラーティー文字とナーガリー文字という具合である。

38）カシュミールも曾ては（シバ神でなく）シャーラダ女神信仰の中心地であった。

39）インド文化圏の呼び名の特徴を反映してアッサム文字とも言う。ヨーロッパではフランス文字とかデンマーク文字という言い方は一般的でない。

40）チョーラ王朝の非碑文用のヴァッテルットウ文字の方である。タミル文字はヴァッテルットウ文字が基本で、14世紀に成立したマラヤーラム文字はグランタ文字が基本であるという。

41）我々の感覚では、商都ボンベイ付近の駅の看板などに、ゴシック体とイタリック体ほどの差しかないようなナーガリー（マラーティー語／ヒンディー語）とグジャラーティーの両文字を併記す必要があるとは思えない。

42）曾ての南部の中心都市、ナンディ・ナーガルの名を持つらしいこの文字は、（弁財）天や神性を意味する語を冠して普通こう呼ばれる。

43）政治面におけるラージプート族に似た要素が見てとれる。グプタ文字の後継と言えるベンガル文字がイスラム教と折り合ったのと対照的である。

44）実際のキリール文字の成立過程には、キリロスの作ったとされるグラゴール文字ほどの明瞭さはないから、そこには過度に拘る必要はない。

45）サンスクリットやパーリー語用に持ち込まれた文字が、現地の口語の文字に転化され始めるまでの事情に関しては、漢字と日本の万葉仮名の関係と似ている。例えば、古チャム文字の場合、グランタは3世紀、チャム語用は4世紀が最古だというから時間遅れは1世紀程度である。

46）無論、15世紀まで続いたチャンパ（占婆）国のチャム文字は(2)である。

47）タイのミャオ族の聖書には、タイ文字の字形と欧州語の原理（語や音節の分ち書き、母音符号を子音字の必ず後方におくなど）で書いたものもあると言う。本稿で度々指摘している折衷方式であろう。

48）アラム文字とアラビア文字の関係に比べれば、この文字とブラーフミー文字との親近感はかなり高いように見える。

49）トンミーサンボータの作で、時期は紀元7世紀からあまり遠くない。

50）漢字の楷書体には有頭字形で、草書体には無頭字形が当たる。

51）チベット文字よりかなり字数が増え、仮名風に音節文字化している。

52）二つの字を離さずに一緒に書いた文字。一つの字の様に見える。秦・漢以後の隷書にはない方式である。勿論、現代に繋がる楷書には無い。

53）地域的な住み分けのあったローマ帝国などとは同じではない。

54）多様な文字のあった地中海周辺では、その使用者達が帝国の統治者を決める争いに勝ったためにラテン語の文字はローマ（の文）字となったが、東アジアでは（歴史上の最初の統一帝国である）秦の字と呼ばない。

55）メソポタミアの楔形文字圏の類似状況については、2.1節で既に触れた。

56）ウィグル文字の可能性があったとしても結果で判断する限りそうなる。

57）普通、字形が変わる場合は借用とは言わない。

58）(4)と1(b)の間の境界線を引くのが難しいので平仮名は外した。

59）相互の関係ははっきりせず、2.3節の＜東地中海周辺＞を思わせる。

60）古くは貴州省に羅甸王国を、また唐代には雲南省に南詔王国を持ち、彝文字は公用文字だったこともあると言う。

61）インダス文明がシュメール文明の植民地ないし飛び地であったという説が以前からあるのは周知の通りである。

62）中国や台湾などの漢語圏の出身者も、少し上達してくると、英語は覚え易いが、日本語は助詞（や助動詞）が手に負えないというような定型で、暗々裏に＜中国語＝英語＞という基準からの外れ具合を頻繁に持ち出す。

63）住民の大多数が世界と感じているという意味で、物理学的・地理学的な意味ではない。

64）無論、単なる可能性だけの話なら、ロシアの場合にグラゴール文字（教会スラブ語）という組合せもあるかもしれないが、本稿の趣旨と外れる。

65）20世紀になってトルコやマレーシアで起きたアラビア文字からラテン文字への交替による実質的かつ意図的な禁書処置を、事情を知らない後代の者が見ればそう見えるのと同じである。

66）19世紀ころから「世界」が地理的に拡大したために、インド連邦はもう世界帝国ではないが、外交や高等教育は英語が、個々人のことは主に州の公用語が担当するという大筋は今でもあまり変わっていないようである。

67）ハカーマニシュ朝時代とはコイネー文がアラム文と入れ替わっているだけである。ただし、エジプト固有の文は二千年を隔てるため「中王国」の言語とは新・旧（古典語）の違いがあると言う。

68）実子間・親戚間の分割支配に留まった点では、その将軍間で引き契られたアレクサンドロスの帝国より表面的には分裂していないように見える。

69）原因はそう単純ではなかろうが、両者の気質の違いは見られる。少なくともイギリスのインド（ベンガル）侵入の初期はそうであろう。

70）皇帝ハンムラビの母語であるカナーン語は公用語になっていない。尚、カナーン語は後に使用者に加わった新参者のためにヘブライ語と呼び名が替わって今日に至っているという。

71）カルデア人は曾てはアラム人やヘブライ人という仲間のセム族と一緒にアラビアから同じ頃に近隣の先進文明地帯へ出てきたが、結果として元来が方言差程度のアラム語を捨て、アッカド語を帝国の公用文字とした。

72）20世紀の極く最近になって、学校での義務教育の徹底や視覚聴覚を媒介とするマ

スメディアの普及及び都市への人口の集中化現象によって、母語方言と同じ言語の標準語を操る世代が増えているかの感があるが、多分それは過渡期の一時的現象か方言自体が変化するかの何れかの結果に終わるだろう。

73) 例え、母語との距離が近くても、中国の「文言」や日本の「候文」等々の様に古典語化する。尚、類例はこれに限らない。

74) 地中海のマルタ島の現在の言語もアラビア語とは通称されていないが、多分同じ状況であろう。

75) "Dog Latin" という俗名もあるらしい。

76) それはエジプトの「新王国」との外交文書に使われるほど力があった。

77) 各地にあるこの碑文のプラークリットの中にも、少いがカロシュティー文字の言語がある。

78) オスマン帝国は文学語だけが近代ペルシャ語である。また、支配的少数者の日常語はどの場合もトルコ系の言語であった。

79) ただ、平仮名とカタカナの2種類の表音文字を使うことは特有である。

80) 例えば、ロンドンの街角などに進出する漢字の看板は増えているようだが、いつまでも見て見ない振りが続くものなのだろうか。

81) 詳細は筆者の修士論文『言語表記における文字についての研究』の第3章にあるので、結果だけを流用する。

82) 例えば、[book] と [shoot] の oo の読みが異なったり、[straight] の gh が無音化していることなどが代表的な例である。

83) 無論、ここから短絡的に「どんな外国語でもむずかしいものだ」と言うつもりはない。

(長崎大学外国人留学生指導センター・助教授)